自己啓発本として読む
『ホール・アース・カタログ』

尾崎 俊介

漆黒の宇宙にぽっかりと浮いた地球――。現代人の目にはさして珍しくもない地球の図像を表紙に配し、『全地球カタログ』（*WHOLE EARTH CATALOG*）という名前を冠したこの大判の雑誌（図 1）、スチュアート・ブランド（Stewart Brand, 1938- ）なる人物によって 1968 年秋に創刊され、5 ドルの定価で販売されたものだが、「access to tools」という副題からも明らかなように、様々な「道具」とその購入法を紹介した文字通りの「カタログ」である。その意味でも、少しも珍しいところはない――。

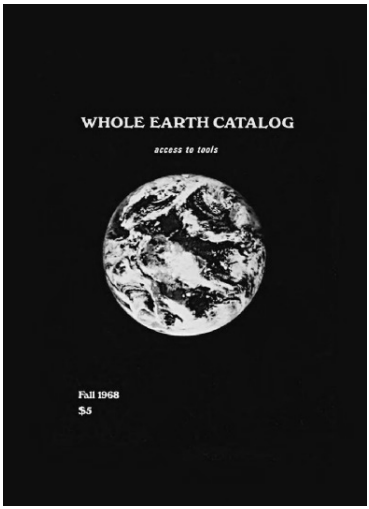

図 1　*WHOLE EARTH CATALOG* 創刊号（1968 年秋号）表紙

珍しいところがないと言うのは、アメリカでは古くから郵送システムを活用したカタログ商法が盛んだからだ。広大な国土を持つアメリカでは、商店のある市街地から数百キロも離れた辺境の地に住む人々の数も多く、現在のようにインターネット・ビジネスが発達する前から、カタログを通じて生活必需品を手に入れることが多かったのである。例えばカタログ販売大手のシアーズ・ローバック社やモンゴメリー・ウォード社、あるいはメイシーズ百貨店の分厚いカタログは、かつてアメリカのどの家庭にも常備されていたし、「L・L・ビーン」をはじめとする服飾品のカタログはもちろんのこと、家具のカタログ、調理器具のカタログ、農機具のカタログ、銃のカタログ、子供の遊具のカタログなど、あらゆるニーズに応じた多種多様なカタログがあって、それらがアメリカ人の日常生活を支えてきた。[1]

しかし、カタログがそれほど陳腐なもの、どの家庭にもあって当たり前なものであるのならば、そんなカタログの一つである *WHOLE EARTH CATALOG*（以下 WEC と略称）について、アップル社の創業者の一人であるスティーヴ・ジョブズが、「私の世代にとってはバイブルの一つであった」[2] と、最上級の賛辞を呈したのはなぜなのか？　否、一人スティーヴ・ジョブズのみならず、1960 年代末から 1970 年代にかけて青春時代を過ごした多くのアメリカ人に強い影響を与え、最終号となる 1971 年 6 月号に至っては 150 万部の大ベストセラーとなって、アメリカで最も権威のある文学賞の一つである全米図書賞を受賞、またその 40 年後の 2011 年にはニューヨーク近代美術館において「Access to Tools 展」と題した WEC の回顧展が開催されるなど、このカタログがアメリカの文化遺産の一つとして、21 世紀に入った今日ですらその重要性が認識され続けているのは、一体全体どういうわけなのだろうか？

WEC は何のカタログ？

WEC がなぜそれほどまでに重要なアメリカの文化遺産であるのか、ということを探る前に、まず、何はともあれ WEC が何のカタログであり、どのようなポリシーをもってどのような商品を掲載・紹介していたのか、その具体的な詳細を述べておこう。

WEC の何たるかを知るためには、このカタログの表紙をめくり、表紙裏に掲げられた「機能」（Function）と「目的」（Purpose）という二つの文章を読むに如くはない。と言うのもこの二つの文章は、本誌の創刊者スチュアート・ブランドがこの雑誌をどのようなものにしたいと思っていたかを端的に表した宣言でもあるからだ。

まず「機能」の項目を見てみよう。そこには「WEC の機能とは、（商品の）評価とその入手方法の提示である。これによってユーザーは、何を入手すべきか、またどうすれば入手できるのかを見極めることができる」とあり、WEC が何らかの商品の良し悪しを評価し、その購入法を紹介するカタログであることが明示されている。またこの一文に続いて同誌に掲載する商品の選定基準が列挙されるのだが、そこには ①道具として有用であること　②自学自習に益するものであること　③高品質・低価格であること　④郵送にて容易に入手できることの 4 点が挙げてあり、「掲載商品の選定は編集スタッフとユーザーからの意見によって常に見直しを図っていく」と付言されている。これらの文章を見る限り、WEC というのは、戦後の日本で創刊され、「商品テスト」によって消費者により良い商品を紹介しようとした隔月刊誌『暮しの手帖』の在り方に少し似たところがあるのかと思わせるところがある。

しかし、ならば WEC は単なる良品紹介情報誌なのかと思いつつ、続く「目的」の項目に視線を移した読者は、いきなり目を醒まされる思いを抱くに違いない。何しろ冒頭の第一声からして「We <u>are</u> as gods and might as well get good at it.」と言うのだから。文法的にはいささか破格な英文で書かれたこの一文を敢えて解読・意訳するならば、「我々は今や神のようなものであり、またもしそうであるならば、上手に神の役割を果たそうではないか」となる。一介のカタログの目指すところにしてはやけに気宇壮大なこの文章、全文を以下に示し、その意訳を添えておこう：

> We <u>are</u> as gods and might as well get good at it.　So far, remotely done power and glory – as via government, big business, formal education, church – has succeeded to the point where gross defects obscure actual gains.　In response to this dilemma and to these gains a realm of

intimate, personal power is developing – power of the individual to conduct his own education, find his own inspiration, shape his own environment, and share his adventure with whoever is interested. Tools that aid this process are sought and promoted by the WHOLE EARTH CATALOG.

（意訳）
我々は今や神のようなものであり、もしそうであるならば上手に神の役割を果たそうではないか。我々とは縁遠いところで築かれた権力と栄光―それは政府や大企業や学校や教会を通じてもたらされてきたものだが―は既に行き詰まり、その明らかな欠陥が現実の利益を損なうところまで来た。このジレンマを廃し、利益を取り戻すために、今、個々の人間の力が増大しつつある。それは「自分自身を教育しよう」、「自らの霊感をつかみ取ろう」、「身の回りの状況を自ら形作ろう」、そして「仮にそうした試みに共感してくれる人がいるならば、その人と連帯しよう」という意思を持った人々が増えているということだ。そして、これらの人々がなそうとしていることに資するツールを紹介・提供すること、それこそが WEC の使命である。

この一文が高らかに宣言していることからすれば、WEC が単なる商品カタログでないことは明らかだろう。何しろ政府や大企業や学校や教会が機能不全を起こしている今こそ一人一人の人間が力を蓄え、その神の如き創造力を自在に発揮しつつ、同じ志を持つ者同士が連帯すべき時だという認識の下、そのために役立つツールを紹介し提供する、それが WEC の存在理由だと言うのだから。

ではこの自ら設定した使命を果たすに当たって、WEC は読者に何を提供しようというのか。以下、同誌の本文たるカタログ部分を概観してみよう。

WEC は紹介する商品を幾つかの項目に分類しているのだが、冒頭に来るのは「システム全体の理解」（Understanding Whole System）という項目。ここで言う「システム全体」とは、「地球」という言葉とほぼ同意だと考えて

よい。WEC というカタログは、なんと、我々が住む地球という惑星のことをもっとよく知ろうではないか、という提案から始まっているのだ。1960 年代のアメリカと言えば「アポロ計画」が進行中であり、宇宙に対する知見は深まりつつあったが、その広大無辺の宇宙の只中にテラリウム的閉鎖システムとして孤立する地球の在り方への認識は、一般にはまださほど広まっていない時代である。そんな時代にいち早く「システム全体の理解」という項目を立て、その中で宇宙や地球の仕組みを解説した最新の科学書や、人口の急増が地球に与えるダメージを論じたポール・R・エーリックの『人口爆発』(Paul Ralph Ehrlich, *The Population Bomb*, 1968) などの本を紹介していたということからして、WEC というカタログがいかに時代に先んじていたかが窺える。

次に「シェルターと土地の利用」(Shelter and Land Use) という項目を見てみよう。この項目では、冒頭、アメリカの独創的な建築家にして思想家でもあるバックミンスター・フラー (Richard Buckminster Fuller, 1895-1983) が提案したドーム状構造物「ジオデシック・ドーム」が紹介される。人が地球の上で暮らすために住居は必須であるわけだが、従来型の住居建築は、使用資材の点でもエネルギー効率の点でも無駄が多過ぎる。そこで最も少ない資材で最も効率の良い住居を作るための一つの提案として、フラーが考案した斬新かつ未来的なドーム構造が紹介されているのだ。もっともその超モダンなジオデシック・ドームの紹介のすぐ後に、アメリカ先住民の使う簡易型テント「ティピ」の構造や作り方が紹介してあるのも WEC ならではの特徴で、地球に負担をかけない住まい方を実践してきた先住民の知恵を、最先端の科学を応用した高効率建造物と同列に扱うというところに WEC のポリシーを垣間見ることができる。ちなみに、「地球に負担をかけない住まい方」ということに関連してヘンリー・デイヴィッド・ソローの『森の生活』(Henry David Thoreau, *Walden*) (のペーパーバック版) の紹介がなされたのも WEC の 1971 年版 *The Last Whole Earth Catalog* の「Land Use」の項目においてである。1973 年頃から始まる「ソロー再評価」の波の背後に WEC の密かな貢献があったことは、通常の文学史の中ではあまり取り上げられることがないだけに、ここに記しておこう。

続く「産業と手仕事」（Industry and Craft）の項目では、各種動力機械の仕組みの解説書や陶芸の指南書に加え、優れた斧や秤などの工具が紹介される。「コミュニケーション」（Communication）の項目では、「サイバネティックス」（通信工学や制御工学、生理学やシステム工学などを融合した学問体系）の提唱者として知られるノーバート・ウィーナーの主著『サイバネティックス』（Norbert Wiener, *Cybernetics*, 1948）の紹介をはじめ、通信技術の原理や、通信機器の現物の紹介などがあるのは当然として、ロック雑誌『ローリング・ストーン』の紹介がなされているところが面白い。これはおそらく WEC が「ロック音楽もまた、人間のコミュニケーション手段の一つだ」と考えていることの証左なのだろう。また「コミュニティ」（Community）の項目ではパンの焼き方やマクロビオティックを解説した本が紹介される他、マッサージの指南書や心臓マッサージによる救命法の解説書などもここに分類される。「放浪」（Nomadics）の項目ではキャンプの方法や荒野でサバイバルする方法を記した本、あるいはリュックや靴など文字通り放浪に必要な用具の紹介があり、新しい理念に基づいた幼児の教育法やヨガの解説書などは続く「学習」（Learning）の項目に含まれる。

以上、紙幅の都合でごく一部しか紹介できないが、ここまで WEC にざっと目を通した読者は、このカタログがどのような「ツール」を扱うのかということについて、おぼろげながらその概要を掴み始めるに違いない。そう、WEC の中で紹介されている「ツール」とは、片や最先端の科学の解説書や高度文明社会の仕組みを解明した社会学の文献、あるいはそうした現代社会の中で自立した人間らしい生き方をしていくための指針を示してくれるような啓発的な思想書であり、片やそうした書籍を読むことによって方向づけられた「自立した生き方」を実践するために必要な各種指南書、及びその生き方を可能にする機器・道具類のことなのであって、言うなれば WEC は現代人が個々に知恵と力を身につけ、地球という惑星の上で賢くサバイバルしていくための究極の「DIY マニュアル」なのである。以下、WEC の誌面の写真（図 2）を掲載するが、これを見ると WEC の DIY マニュアルとしての側面が一層明らかになるのではないだろうか。

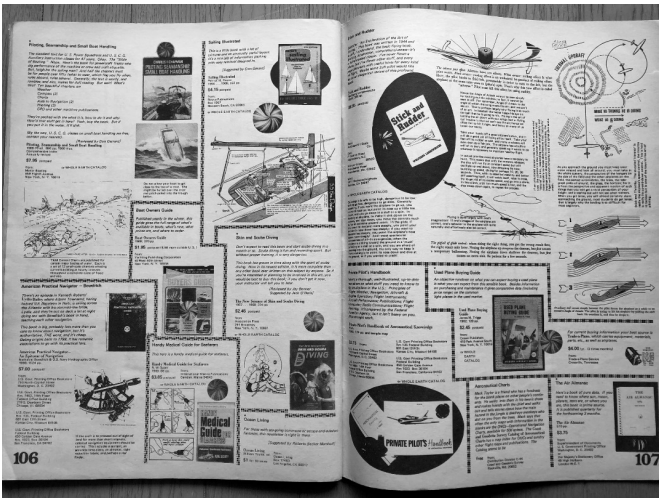

図 2　WEC　1969 年秋号誌面

なお、編集用 DTP ソフトはおろか、パソコン自体が存在しない 1960 年代末にこうした誌面を作るにあたり、同誌の編集部ではタイプライターで作成した原稿や図・写真をハサミと糊で切り貼りして版下を作るという、極めて原始的な方法が取られたという。究極の DIY マニュアルたる WEC の編集作業は、まさに DIY によってなされていたのだ。

スチュアート・ブランドと LSD の時代

さて、WEC が凡そこのようなものであったとして、ではそんな斬新なカタログ雑誌を創刊したスチュアート・ブランドとは、一体何者なのだろうか？

スチュアート・ブランドは 1938 年、イリノイ州ロックフォードに生まれた。ニューハンプシャー州にある名門「フィリップ・エクセター・アカデミー高校」を卒業してスタンフォード大学に進学、ベストセラーとなった警世の書『人口爆発』（前述）を書いて後に名を成すことになるポール・R・エーリックの指導の下で生物学を専攻するが、大学時代にはエーリックの他に、『コルテスの海』をものした海洋生物学者エド・リケッツ（Edward Flanders Robb Ricketts, 1897-1948）や、『知覚の扉』で知られるイギリス人作家オル

ダス・ハクスリー（Aldous Leonard Huxley, 1894-1963）、また前述したノーバート・ウィーナーの思想に強い影響を受けたという。

その後、1960 年に大学を卒業したブランドは、陸軍に入隊して 2 年間を軍人として過ごし、除隊後は当時「ボヘミアン・アート」の牙城でもあったサンフランシスコ・アート・インスティテュートでデザインを学んだり、サンフランシスコ州立大学で写真を学んだりするが、この頃のブランドは、当時話題の幻覚剤であった LSD に強い関心を抱いていて、1962 年、国際高度研究財団が行なっていた LSD の臨床試験に被験者として参加、この時の LSD 体験がきっかけとなって「青の時代」ならぬブランドの「LSD の時代」が始まる。[3]

ここでブランドと LSD の関係を語る前に、当時のアメリカ社会における LSD の位置づけについて一言しておかなければならない。と言うのも、今日では非合法麻薬としての印象が強い LSD ではあるが、アメリカでは 1966 年 10 月に非合法化されるまで、これを所持・服用することに特段の罰則は無かったし、それどころか 1960 年代前半まで、LSD はアメリカ社会の期待を一身に担った新薬だったからである。[4]

そもそも LSD という物質が発見されたのは 1938 年のこと。スイスの製薬会社であるサンドウズ社に勤務していた研究者アルバート・ホフマン（Albert Hofmann, 1906-2008）[5] が、循環器系疾患の薬の開発のため、ライムギの麦角菌から合成アルカロイドを作る実験の過程で作り出したものである。ただ当初の目的を果たす効能が無かったため、この新物質のことはしばらく打ち捨てられていたのだが、5 年後の 1943 年、ホフマン自身が偶然、微量の LSD を吸い込んで精神錯乱に似た幻覚を体験したことによって、この物質がその後にたどる運命は激変することになる。それ以前、つまりフロイトの時代から精神病というのは幼少期に受けた心理的なトラウマによって引き起こされると考えられてきたわけだが、もし LSD のような純然たる化学物質によって精神錯乱が引き起こされるのなら、精神病自体、脳内化学物質に起因する物理的な現象なのかも知れない。つまり幻覚作用を引き起こす LSD の発見が、精神病の原因や治療に対する考え方に大転換をもたらす可能性が出てきたのである。また LSD が時に引き起こす悪夢（バッド・トリップ）が、アル

コール中毒患者が禁酒を強いられた時の発作に似ていたことから、軽度アルコール中毒患者に LSD を摂取させることで、二度と酒を飲みたくないと思わせることができるのではないかという可能性も出てきた。かくして LSD は 1947 年、「精神異常発現剤」として、あるいは「アルコール中毒治療薬」として、サンドウズ社から発売されることになる。

ところが 1950 年代に入ると、オスカー・ジャニガー（Oscar Janiger, 1918-2001）、シドニー・コーヘン（Sidney Cohen, 1910-87）、ベティ・アイズナー（Betty Eisner, 1915-2004）といったカリフォルニア大学の研究者たちによって、LSD の新たな側面にスポットライトが当てられることになる。彼らの研究により、LSD がもたらす幻覚には、精神錯乱というネガティヴな面のみならず、人間の感性（特に色彩感覚）を高め、それによって「神秘体験」と名付ける他ないような意識拡張をもたらすポジティヴな効果もあることが判明したのだ。かくして精神病に似た症状を引き起こすための薬品であった LSD は、逆に軽度の鬱病を治療したり、あるいは画家や音楽家などの芸術家が創作に必要なインスピレーションを得るためのものとして——換言すれば、健康な人間の意識拡張を促すものとして——利用することが検討されるようになっていくのである。

だが、LSD には人間の意識拡張を促す作用があるということが判明した時、その可能性にいち早く目を付けたのはアメリカ中央情報局（＝CIA）や軍だった。アメリカでは 1930 年代からデューク大学教授 J・B・ライン（Joseph Banks Rhine, 1895-1980）が中心となって「超感覚的知覚」（extrasensory perception／ESP）や「念力」（psychokinesis／PK）についての研究が進められていて、冷戦時代には仮想敵国のミサイル発射ボタンを念力で無効にする方法が模索されるなど、人間の超能力を軍事利用することへの期待が高まっていたのだが、[6] LSD の意識拡張作用が明らかになるや、CIA はこの新物質の軍事利用の可能性を追究すべく、「MK ウルトラ計画」と呼ばれるプロジェクトを起ち上げ、西海岸の主要大学や各種研究所に潤沢な資金を提供して、LSD 研究を強力にバックアップし始めるのである。またそうなればこの新物質に対する研究者たちの関心が高まったのも当然で、1965 年までにアンフェタミンやメスカリンなど様々な幻覚剤の効用について 2000 本もの論文

が書かれた中で、その大半はLSDに関するものだったという。[7]

だが当時、LSDをはじめとする幻覚剤に関心を抱いていたのはCIAや軍や専門の研究者たちだけではなかった。一般のアメリカ人もまた、幻覚剤なるもの全般に大いに興味を持っていたのである。と言うのも、1950年代から60年代にかけて、この種の幻覚剤が持つ意識拡張作用をめぐる興味深い言説が、アメリカ社会に蔓延していたからである。

例えばビート作家ウィリアム・S・バロウズの『ジャンキー』(William S. Burroughs, *Junkie,* 1953)という小説を読むと、モルヒネに飽いた麻薬中毒者たちが、新たな麻薬として知られるようになった「ペヨーテ」(サボテンの一種で、メスカリンが抽出される)や、さらに強力な幻覚作用があるという「ヤーヘ」(南米のつる性植物から抽出される幻覚剤)を求めてメキシコやコロンビアに出かけるという場面があり、1950年代前半には既に一部のアメリカ人には幻覚成分を含んだ植物のことが知られていたことが窺える。

が、その種の植物由来の幻覚剤のことが広く一般に知られるようになったのは、国民的大雑誌である『ライフ』誌が、1957年5月13日号において「マジック・マッシュルームを探して」(“Seeking the Magic Mushroom”)という長文記事を掲載したことに依るところが大きい。これは素人真菌学者であり、かつアメリカを代表する大銀行であるJ・P・モルガン銀行の副頭取でもあったロバート・ゴードン・ワッソン(Robert Gordon Wasson, 1898-1986)が、メキシコ先住民マザテク族の老祈祷師マリア・サビーナに直接取材し、一族が宗教儀式に用いるシビレタケ属のキノコを西洋人として初めて摂取、このキノコに含まれる幻覚成分「サイロシビン」の効果を実体験した経験を綴ったもので、これが「マジック・マッシュルーム」なるものの存在を世に知らしめる契機となったのだ。[8] そしてこの記事に好奇心を刺激された多くのアメリカ人が、謎のキノコを求めてメキシコに大挙して押しかける事態となったのである。

幻覚剤ブームに火をつけたのが高位の銀行員であったとすれば、その火に油を注いだのはハリウッドの映画関係者たちであった。LSD研究のメッカの一つであったカリフォルニア大学ロサンゼルス校がハリウッドの隣にあったこともあり、スタンリー・キューブリックやジャック・ニコルソン、ジェー

ムズ・コバーンなど、前述した LSD 研究者オスカー・ジャニガー（彼はウィリアム・S・バロウズと共著で『麻薬書簡』（*The Yage Letters*, 1963）を著したビート詩人、アレン・ギンズバーグ（Allen Ginsberg, 1926-97）のいとこでもある）から LSD の処方を受けた映画人は数多く、そのことがまた、LSD の謎めいた魅力を高めるのに一役買った。とりわけジャニガーの患者として有名だったのは名優ケーリー・グラントで、彼が 1959 年のインタビューの中で「（LSD によって）すべての悲しみや虚しさが消え、生まれ変わった」と述べ、この薬の絶大な効果を激賞したために、全米の精神科病院には LSD の処方を求める人々が殺到したという。[9]

それだけではない。『カッコーの巣の上で』（*One Flew Over the Cuckoo's Nest*, 1962）というベストセラー小説を書いて時代の寵児となった作家ケン・キージー（Ken Kesey, 1935-2001）もまた、LSD の拡散に一役買っている。1960 年に前述した「MK ウルトラ計画」の一端としてメンロパーク退役軍人病院で行われた臨床試験の被験者となり、75 ドルの報酬と引き換えに LSD を摂取したキージー[10] は、その時の鮮烈な体験を他の多くのアメリカの若者たちも味わうべきだと考え、1964 年、「メリー・プランクスターズ」と命名した仲間たちと共に蛍光塗料を塗りたくった中古スクールバス「Further 号」に乗り込んで全米一周の旅に出るや、行く先々で LSD 入りのクール・エイド（＝清涼飲料水）を振る舞う一連の LSD パーティ、通称「アシッド・テスト」を開催し始めたのだ。[11]

その他、1960 年にマジック・マッシュルームを試したのを機に、幻覚剤研究に性急に邁進したハーバード大学講師のティモシー・リアリー（Timothy Francis Leary, 1920-96）が、同大の学生を被験者とした大規模な幻覚剤実験「ハーバード・サイロシビン計画」を大学当局の許可なく実施しようとしたことが発覚し、リアリーに協力していた同大学助手リチャード・アルパート（Richard Alpert, 1931-2019）と共にハーバード大学を追われることとなった顛末が世間を騒がしたのが 1963 年。カリフォルニア大学ロサンゼルス校で人類学を学んでいた大学院生のカルロス・カスタネダ（Carlos Castaneda, 1925-98）が、その研究の過程でアメリカ先住民ヤキ族の呪術師の弟子となり、マジック・マッシュルームを服用することで物体を通過したり、空を飛

んだり、カラスに変身したりする術を身に着けるまでの過程を記した『ドン・ファンの教え』（*The Teachings of Don Juan: A Yaqui Way of Knowledge*）がベストセラーになったのが 1968 年、というように、この時代、「LSD」とか「幻覚剤」という言葉は、一般のアメリカ人の誰もが耳をそばだてるような、大いなる関心の的だったのである。

『知覚の扉』

だが、このアメリカと幻覚剤との蜜月時代において最も大きな影響力を持ったのは、先に名前を挙げたイギリス人作家オルダス・ハクスリーの『知覚の扉』（*The Doors of Perception*, 1954）という本であった。

インドの霊的指導者クリシュナムルティ（Jiddu Krishnamurti, 1895-1986）とも親交があり、また古今東西の宗教的箴言を縦横に引用しつつ、その底流にある神秘思想に迫ろうと努めた『永遠の哲学』（*The Perennial Philosophy*, 1945）を著すほどに神秘思想や神秘体験に興味のあったハクスリーは、1953 年の春、イギリス人の精神科医で当時幻覚剤研究の最前線に立ち、後に「サイケデリック」という用語の命名者ともなるハンフリー・オズモンド（Humphry Osmond, 1917-2004）の立ち合いの下、0.4 グラムのメスカリンを服用する。かくして著名な性科学者ハヴロック・エリス（Henry Havelock Ellis, 1859-1939）[12] 以来、西洋人としては半世紀ぶりのメスカリン体験者となったハクスリーであるが、この時の詳細な記録を元に書き上げられた『知覚の扉』によると、メスカリンの影響下では、見慣れた絵画ですら今まで気づかなかった細部の意味まで分かるようになるなど、目を向けるものすべてがまるでベールを取り除くようにその真の姿を開帳したという。しかしその一方、その新奇な知覚世界の美しさに魅了されてしまうと、能動的に何かをしようという気が一切起こらなくなってしまうという副作用についても、ハクスリーは報告している。メスカリンが人から能動性を奪うという現象について、以下、『知覚の扉』の一節を引用してみよう。

> ものの煌々たる栄光へこのように参画することによって、いってみれば、人間存在の日常的なことがら、生活上必要欠くべからざる関心事、とりわ

け個々人に係ることがらの入る余地がなくなってしまうのである。というのは個々人は自我であり、それに対して少なくとも一つの点ではそのときの私は〈非自我〉であり、同時に私を取り巻くものの〈非自我〉を知覚し、またそれらの〈非自我〉そのものでもあるからである。この新生の〈非自我〉にとって、いま一時的に自我であることをやめたその失った自我の行動、様態、またその自我について考えること自体、不愉快であるということは実際のところないにしても（愉快・不愉快という概念はそのときの私の思考にはなかったので）、とてつもなく無関係なものに思えた。[13]

ハクスリーは、この印象的な現象を次のように解釈する。つまり人間はもともと「遍在精神」（Mind at Large：宇宙に普遍的に存在する超越的意識）の一部であって、元来は物事の本質を完全に認識することができるのだが、このような人間の能力が常に 100%発揮されてしまうと、自身の生存のために能動的な努力をする気が無くなってしまう。そこでそうした無気力状態を防ぎ、生存を続けるために、人間には「減量バルブ」（reducing valve）が備わるようになり、それと引き換えに認識力は大幅に減少することとなった。またその減少した認識内容を表象する手段として人間は「言語」を生み出し、以後、その言語を通して間接的に世界を認識するようになったため、現実世界との隔絶は一層深まり、同時に自分が「遍在精神」の一部であることも忘れてしまった。ところがある種の特権的な人々、例えばウィリアム・ブレイクのような幻視者やヴィンセント・ヴァン・ゴッホのような画家は、何らかの理由で減量バルブが働かず、人間本来の認識力を十全に保持していたため、それぞれの分野で傑出した能力を発揮することができたのではないか――。

実は今述べた「遍在精神」や「減量バルブ」という概念はハクスリーのオリジナルではなく、20 世紀初頭に活躍したイギリスの哲学者 C・D・ブロード（Charlie Dunbar Broad, 1887-1971）[14] のアイディアを借用したものなのだが、この概念を踏まえた上でハクスリーは、メスカリンのような幻覚剤には減量バルブにある種の「バイパス」を作る作用があるのではないかと考えたのである。またそうであるならば、幻覚剤を服用すれば誰もが遍在精神

に立ち返り、本来人間が持っているはずの完全な認識力を取り戻すことができるに違いない。

幻覚剤の力を借りて「減量バルブ」という足枷を外してしまえば、人間は本来持っている万能の力を 100%発揮できるようになるはず――このようなハクスリーの言説は、少し乱暴に言い換えるならば、「幻覚剤を服用すれば、どんな凡人でも天才になれる」ということでもある。そんな夢のような幻覚剤の効能に、英国の名門に生まれた著名作家オルダス・ハクスリーが、自身の体験を踏まえて太鼓判を押したというのだから、『知覚の扉』が当時のアメリカ社会に大きな衝撃を与えたことは想像に難くない。実際、この本が若い世代のアメリカ人に広く読まれていたことは、1965 年にロサンゼルスで結成されたサイケデリック・ロック・グループ「ザ・ドアーズ」が、グループ名を本書のタイトルから取っていることからも窺える。

「脳の 10%神話」とトランセンデンタリズム

ところで、「(減量バルブのせいで) 人間は本来の能力を十全に発揮できていない」というハクスリーの言説が、とりわけアメリカで広く受け容れられたことには歴とした理由がある。19 世紀アメリカの心理学者で、大衆的な人気もあったウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) が、週刊科学雑誌『サイエンス』の 1907 年 3 月 1 日号に寄稿した「人間のエネルギー」(“The Energies of Men”) という一文の中に、「人間が本来あるべき姿と比べれば、我々は半分寝ているようなものだ。我らの炎には水がかけられ、給気孔は閉ざされている。我々は活用できるはずの脳や精神の能力のほんの一部しか使っていない」と記したことを一つのきっかけとして、「人間は本来の能力の一部しか使っていない」という説が、アメリカでは 20 世紀初頭からしばしば人々の口の端に上るようになっていたのだ。またこれに加え、ローウェル・トーマス (Lowell Thomas, 1892-1981) という著名なジャーナリストが、1936 年に出版されて記録的なベストセラーとなっていたデール・カーネギーの自己啓発本『人を動かす』(Dale Carnegie, *How to Win Friends and Influence People*) に付した推薦文の中で、「ハーバード大学のウィリアム・ジェイムズ教授によれば、平均的な人間は潜在能力の 10%しか利用して

いない」と、根拠のない数値まで挙げて引用してしまったため、先のジェイムズの説はいつしか「脳の 10%神話」（10 percent of the brain myth）と呼ばれるようになり、ますますアメリカ社会に流布してしまった。だからこそハクスリーが「減量バルブ」という概念を持ち出した時、アメリカ人なら誰しもこの「脳の 10%神話」を思い出し、ハクスリーの言わんとしていることをすぐさま理解したのである。

だが、ウィリアム・ジェイムズ由来の「脳の 10%神話」にせよ、オルダス・ハクスリー由来（あるいは C・D・ブロード由来）の「減量バルブ説」にせよ、「人間はその持てる能力の一部しか使ってない（＝人間は本来、もっと能力があるはずだ）」という系統の言説が特にアメリカ人にアピールすることには、実はもう一つ、深い理由があった。そしてそのことには、アメリカ独自の宗教思想としての「トランセンデンタリズム」が関係してくる。

イギリスの宗教的腐敗を批判し、より純粋な信仰の形を求めたピューリタンが母体となって建国されたアメリカでは、全能の神を絶対的存在とし、対する人間を無力な被造物と見なすカルヴァン主義神学の影響が伝統的に強く、人間は教会の指示通りに厳格な信仰生活を営みながら、神の定め／運命に唯々諾々と従うしかないという悲観的な人間観が支配的だった。しかし理性の時代である 18 世紀に入ってベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706-90）が登場し、「勤勉努力によって人間の運命は良い方に変えられる」という楽天的な考え方を自らの生涯を通じて体現したあたりから事情は変わり始める。そして 19 世紀の思想家ラルフ・ウォルドー・エマソン（Ralph Waldo Emerson, 1803-82）がこの流れをさらに大胆に押し進め、人間は、人間を取り巻く自然と同様、「大いなる魂」（The Over-Soul、エマソン流の「神」の謂い）の一部であって、その本来的な能力は「大いなる魂」に劣るものではなく、ましてやカルヴァン主義者たちが主張するような無力な存在ではないとする考え方、いわゆる「トランセンデンタリズム」（transcendentalism、超越主義）を打ち出すと、この「人間肯定」の考え方は、根強く残るカルヴァン主義の伝統の対極に位置するものとして――つまりピューリタニズムに対抗する「カウンター・カルチャー」として――アメリカのもう一つの思想的伝統となり、以後、カルヴァン主義に代表される「人

間否定の思想」と、トランセンデンタリズムに代表される「人間肯定の思想」が鬩ぎ合う、アメリカ独自の思想的ダイナミズムが形成されることとなる。

と、このように説明して来れば、「脳の 10%神話」にせよ、「減量バルブ説」にせよ、「人間は本来、神と同等の創造力を持っているはず」という人間肯定系の幻想――それは WEC の表紙裏に掲載された「我々は今や神のようなものであり・・・」という宣言のことを思い出させる――が、トランセンデンタリズムの伝統の延長線上にあるものであって、それゆえ多くのアメリカ人にとっては馴染みがあり、受け容れ易いものであったことも理解されるだろう。またそうであったからこそ、人間本来の能力を取り戻させてくれる（のではないか）と考えられていた幻覚剤、とりわけ LSD に対してアメリカ人は興味を持ち、また大いに期待をかけてもいたのである。

パラダイム・シフト、ニューエイジ、サンフランシスコ

では 1960 年代という時代に、なぜアメリカ人は LSD などの幻覚剤を使ってまで、人間本来の能力を取り戻そうとしていたのか。

端的に言って、1960 年代のアメリカは政治的に激動の時代を迎えていた。国内に目を向ければ、黒人差別撤廃を求めた公民権運動が白人側のバックラッシュにあって停滞し、苛立つ黒人市民が暴徒化して全米の大都市で「長く暑い夏」と呼ばれる暴動が頻発していたし、他方、国外問題に目を向ければベトナム戦争が泥沼化しており、反戦運動も激しさを増すばかり。内政・外政共に出口が見えないという行き詰まり感の中、何らかのパラダイム・シフト（「パラダイム・シフト」という言葉自体、科学史研究者のトーマス・クーンが『科学革命の構造』（Thomas Samuel Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, 1962）という著書の中で用いた新しい用語で、例えば天動説から地動説への変化、あるいはニュートン力学から相対性理論への変化など、従来の思考枠を根底から覆すような新しい考え方への移行を意味する）が切望されたのも当然だろう。

そして仮にそうしたパラダイム・シフトが起こるとすれば、それは「1968 年」に起こるのではないかということがまことしやかに噂されていた。と言うのも、アリス・ベイリー（Alice Ann Bailey, 1880-1949）やデイン・ラジ

ャー（Dane Rudhyar, 1895-1985）といった神智学系の著名占星術師の影響もあり、この年、キリスト教が支配していた「魚座の時代」が終わって、新たにみずがめ座（アクエリアス）の時代が、すなわち「ニューエイジ」が始まるのではないかという噂が出回っていたからである。実際、フィフス・ディメンションが歌うテーマ・ソング「アクエリアス」が印象的なロック・ミュージカル『ヘアー』の流行（1968 年）や新人類「スター・チャイルド」の誕生を描いた『2001 年宇宙の旅』の公開（1968 年）、それに「ウッドストック音楽祭」（1969 年）の異様な盛り上がりなど、アメリカではニューエイジの到来を予期させる文化的事象には事欠かなかったし、アメリカにおけるこのようなニューエイジ志向の潮流に関しては、ローマ教皇庁ですら懸念を表明したほどだった。[15]

ところが、そうした期待に満ちた 1968 年のアメリカに実際に起こったのは、公民権運動収束のカギを握っていたマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の暗殺であり、またベトナム戦争収束のキー・パーソンとして大統領予備選挙を戦っていた元司法長官ロバート・ケネディの暗殺であった。相次ぐ暗殺事件がもたらした絶望感は大きく、既存の政治／社会体制にはもはや希望が持てないという厭世観がアメリカ社会全般、とりわけ当時の若者たち、すなわち 1945 年から 55 年の間に生まれた「前期ベビー・ブーマー世代」の学生たちの間に一気に広まることとなったのも不思議ではない。

彼らの中のある者は、戦後の好景気の中で物質的豊かさを享受していた親世代の価値観――いわゆる「スクエア」な価値観――を否定し、親の敷いたレールの上を歩むのを拒否すべく、就職前に大学を意図的にドロップアウトした。またある者は良心的兵役拒否を申請してベトナム戦争に加担することを避けた。そして彼らの多くが貨幣を媒介にした大量生産・大量消費の経済システムを忌避し、その代わりに物々交換を前提にした手作り製品の生産や、普遍的人類愛に基づく相互扶助によって生計を立てることを試みた。そしてそんな若者たちが自分たちなりのパラダイム・シフトの実験場として選んだのが、サンフランシスコだった。なぜならそこは反抗的な若者を受け容れる寛容さを持った町として、つとに知られていたからである。

ここで簡単に 20 世紀半ば過ぎのサンフランシスコの文化的状況を概括し

ておくと、1950 年代初頭のサンフランシスコは、前述したアレン・ギンズバーグやジャック・ケルアック（Jack Kerouac, 1922-69）をはじめとするビート・ジェネレーションの作家や詩人のたまり場であり、特に「ノース・ビーチ」と呼ばれる地区が彼らの牙城であった。そしてその後 1956 年から 1957 年にかけ、ビート・ジェネレーションの詩人・作家たちに憧れ、彼らのライフ・スタイルを模倣する若者たちがノース・ビーチに群がるようになると、そんな若者たちの風俗を『タイム』誌や『ライフ』誌などの大雑誌がこぞって取り上げるようになり、さらに 1958 年、地元紙『サンフランシスコ・クロニクル』の記者ハーブ・カーン（Herb Caen, 1916-97）が彼らを「ビートニク」（beatnik）と名付けたことを機に、ノース・ビーチのビートニクたちは、彼ら自身が観光名所となった。事実、1960 年頃のノース・ビーチには、噂に聞くビートニクたちを一目見ようという観光客たちがバスを連ねてアメリカ中から押し寄せ、バスの窓から街にたむろする彼らの姿にカメラを向けた。バスから降りてビートニクたちに直接接触するのは危険だと思われていたからである。そして黒のタートルネックに黒のジーンズという典型的なビートニクの姿を模した「顔出しパネル」が置いてある場所で記念写真を撮り、故郷への手土産としたのだった。だが、このようにしてノース・ビーチが観光名所となるにつれ、この辺りの家賃が急激に上がったため、ビートニクたちはこの界隈から退去し、ヘイト・アッシュベリー地区に移住することになる。[16]

しかしノース・ビーチからヘイト・アッシュベリーへの若者たちの移動は、ビートニクの時代の終焉をも意味した。先に述べた前期ベビー・ブーマー世代の若者たちが大挙してヘイト・アッシュベリーに移住してきたため、結果としてビートニクたちが駆逐されてしまったからである。特に 1966 年に入ってテレビの三大ネットワークや『タイム』誌、『ニューズウィーク』誌、『ライフ』誌、『ルック』誌といった国民的大雑誌がこぞってサンフランシスコを目指す若者たちの風俗を特集するようになると、この傾向はますます加速することとなり、高校生ほどの年齢の若者たちまでヘイト・アッシュベリーに集まり出したため、「サマー・オブ・ラブ」と呼ばれた 1967 年の夏、この界隈の若者人口は一挙に 10 万人にまで膨れ上がった。当時のサンフランシス

コ市全体の人口が 80 万人だったのだから、ヘイト・アッシュベリー地区に群がっていた若者の数がいかに異常であったか、想像できるだろう。そしてそんな彼らのことを、「ビートニク」の名付け親でもあるハーブ・カーンの命名にならって、人々は「ヒッピー」（hippie）と呼んだ。

なおヒッピーたちでごった返すヘイト・アッシュベリーの「サマー・オブ・ラブ」の噂は、遠く日本にも届いていたようで、小説家の城山三郎が『サンデー毎日』への連載記事の取材のため直接ヘイト・アッシュベリーに赴き、その様子を以下のようにレポートしている。

> ハイト（ママ）に近づくと、なるほど、いるわ、いるわ、ヒッピーのトレードマークである肩に垂れる蓬髪が、路上にあふれていた。金色、亜麻色、栗色、にんじん色・・・。
>
> 女たちは、膝上二十センチがいるかと思えば、ブーツをはいているもの、はだしのもいる。ひげを生やしたあねご格もあれば、まだもぎたての初々しい子もいる。（中略）たしかに、それは一種異様としかいいようのない社会であった。豪華船に見たアメリカはもちろん、どのアメリカともちがう。しかも、アメリカなのだ。アメリカに生きる人間のうずきのようなものが、にじみ出ている。[17]

既存の社会体制に組み込まれることを拒否し、自分たちなりの新しい社会を構築せんとこの地に集まってきた若者たちの風俗を、城山は鋭くも「アメリカに生きる人間のうずき」と喝破したのだった。

カウンター・カルチャー

そして彼らヒッピーたちが試みていたパラダイム・シフトに「カウンター・カルチャー」というネーミングを与えたのが、1969 年に『対抗文化の思想』をものした歴史学者セオドア・ローザック（Theodore Roszak, *The Making of a Counter Culture: Reflections on the Technocratic Society and Its Youthful Opposition*）であり、同じパラダイム・シフトを「意識Ⅲ」と呼んだのが 1970 年に『緑色革命』を著した社会科学者チャールズ・A・ライク

（Charles A. Reich, *The Greening of America*）であった。アメリカ社会を揺るがし始めたこの社会的気運を的確に読み取り、共にベストセラーとなったこの両書に共通するのは、大きな政府の専門技術官僚（テクノクラート）と大企業が掲げた「公共の利益の追求」の旗印の下で個人としての人間の権利がないがしろにされる一方、そこで出てくる不満は延々と垂れ流しされるテレビ・コマーシャルによって物欲にすり替えられ、なし崩しにされていく、そんなシステマチックな高度管理社会――いわばオルダス・ハクスリーが『すばらしい新世界』（1932）という小説の中で、またケン・キージーが『カッコーの巣の上で』（既述）の中で描いたディストピアにも似た高度管理社会――への痛烈な批判である。と同時に、もう一つこの両書に共通するのは、行き詰った現代アメリカ社会の仕組みを変え得るのは、ヒッピーたちに代表される十代、二十代といった若い世代だろうという予測だった。ちなみにヒッピーの語源である「ヒップ」（hip）とは「見抜く」という意味の隠語であり、従って「ヒッピー」とは「見抜いた者」を意味する。高度管理社会のからくりを見抜き、そのからくりに絡め捕られることを拒否したヒッピー世代の若者たちこそ、高度管理社会に立ち向かうことができる唯一の希望だという認識が、ローザックにも、またライクにもあったのだ。[18]

加えて若い世代が高度管理社会の在り方を変えるとしたら、彼ら独自の革命の方法を用いるだろうという予測も、両書に共通していた。つまり新しい革命は、旧世代のマルクス主義的革命、すなわち階級闘争と実力行使による革命ではなく、一人一人の人間が意識拡張をし、目覚めること――言うなれば人間が本来の完全な能力を取り戻すこと――でしか達成できないという認識がそこにはあり、この認識は当時の（特に若い世代の）アメリカ人に強くアピールするところがあった。そして意識拡張こそがアメリカ社会を変える起爆剤だという共通認識があったことが、その意識拡張の具としての幻覚剤／LSD への寛容さと、それを服用することへの興味・関心を高めることにつながっていたのである。

通過儀礼としての LSD

となれば、スコット・マッケンジーの名曲「花のサンフランシスコ」（Scott

McKenzie, “San Francisco,” 1967）を口ずさみつつサンフランシスコにやってきて、噂に聞いたヘイト・アッシュベリー地区の安アパートで集団生活を始めたヒッピーたちが、これ幸いと LSD を試し始めたのも無理はない。

そして幸か不幸か、ヒッピーたちにとって LSD を入手するのはさほど難しいことではなかった。と言うのも、サンフランシスコ界隈では、1966 年に非合法化された後ですら、アウグストス・オーズリー・スタンリー三世（Augustus Owsley Stanley III, 1935-2011）なる人物が自家製造した質の高い LSD が大量に出回っていて、ロンとジェイのセリン兄弟（Ron & Jay Thelin）が 1966 年の元日にヘイト・アッシュベリー地区に開店した「サイケデリック・ショップ」というヒッピー御用達の店で、誰でもそれを買うことができたからである。[19] 否、買うことができたばかりでなく、買って服用することが推奨されていた。ヒッピーの間で生活し、その経験をルポルタージュとして発表したバートン・H・ウルフによると、ヒッピーたちに「仲間」として認められるためには、幻覚剤でのトリップ体験は必須であったという。この時代、ヒッピーたちにとって LSD は一種の通過儀礼であり、これを経なければ同志とは認められなかったのだ。[20] そして前述した LSD 教の使徒、元ハーバード大学講師ティモシー・リアリーが 1967 年 1 月 14 日にサンフランシスコのノース・ビーチで行われたヒッピーの大集会「ヒューマン・ビーイン」に登壇し、「Turn on, tune in, drop out.」（ドラッグで意識拡張し、その新しい意識に集中し、既存の社会から脱落しろ）という標語を獅子吼して焚きつけると、LSD はヒッピー・ムーヴメントの必須事項、カウンター・カルチャーの重要なる一側面としてさらに広まった。

地球は丸い

随分長い前置きになってしまったが、1960 年代半ばのサンフランシスコがこのような状況にあった中、この地に居を構えていたスチュアート・ブランドが LSD に興味を持ち、実際にそれを摂取して幻覚体験をしたというのは、だから、特段不思議なことではないのである。それどころかブランドは、自らの経験から LSD 体験は万人に共有されるべきものと考え、1964 年には前述した作家ケン・キージーのトリップ仲間である「メリー・プランクスター

ズ」の一員となり、キージーが主催したLSDの祭典「アシッド・テスト」をサポートした他、1965年1月には自ら「トリップ・フェス」を主催している。その意味でブランドは、カウンター・カルチャーの一側面であるLSD・ムーヴメントの中心に身を置いていたとすら言えるのだ。

しかし、ならばブランドはこの時代のヒッピーの一人だったのかと言えば、実はそうではない。そもそもカウンター・カルチャーの担い手たるヒッピーたちが前期ベビー・ブーマー世代（1946～55年に生まれた世代）に属していたことからすると、1938年生まれのブランドは年齢が少し上で、カウンター・カルチャー全盛期の1967年には既に29歳、「30歳以上の大人を信用するな」という当時のヒッピーたちの間で盛んに言われていたスローガン[21]からすれば、「信用できない大人」のカテゴリーに限りなく近づいていた。また「ベトナム戦争反対」を旗印とするヒッピーたちとは異なり、ブランドは自らの意志で軍隊に入隊した経験を持つ。要するに、世代が違うのだ。またそのことに加え、ブランドは意識拡張の手段としてのLSDには強い興味・関心を抱いていたものの、LSDがもたらす幻覚世界にただ浸っているだけで、そこで得られた新しい意識を基に何らかの行動を起こすことをしない若者たちの怠惰な在り様にはまったく共感していなかった。カウンター・カルチャーと言いながら、その実、裕福な親世代の経済的サポートを受け、モラトリアム期間を謳歌しているだけの似非ヒッピーたちと付き合うには、ブランドという人物は大人過ぎ、合理的過ぎ、現実的過ぎたのである。

ならばブランドがLSDと係わった一連の体験から得たことは何だったのか？　LSDの意識拡張作用によって彼はどんな啓示を受けたのか？

それは、「地球は丸い」ということだった。[22]

1966年の春、サンフランシスコのノース・ビーチにあった2階建ての自宅の屋根に上がって100マイクログラムのLSDを飲み、ダウンタウンの方を眺めるともなく眺めていた時、ブランドは遠くの建物の屋根が織りなす線が水平ではなく、端に行くほど下にカーブしていることに気づく。それは実際の光景であったかも知れないし、LSDがもたらした視覚の錯乱であったかも知れない。が、いずれにせよこの時ブランドは、地球が丸いということを強烈に意識する。また地球の丸さと意識した瞬間、どこまでも続く平面として

捉えていた時には思い至らなかった地球の小ささや地球資源の有限さにもブランドは気づく。いわば彼は、WEC 創刊号の表紙そのままに、漆黒の宇宙に浮かぶ小さな有限の惑星としての地球の姿を幻視したのだ。無論、この時の経験が「丸ごと一つの地球」、すなわち「全地球」（the whole Earth）というアイディアに直結したことは言うまでもない。

そして LSD の摂取によって得たこの「全地球」的啓示を、ブランドは無駄にはしなかった。彼は自分が見た啓示と同じものを、他の同胞も見るべきだと考えたのである。が、しかし、LSD の幻覚作用は人によって異なるので、LSD を服用した誰もが「全地球」を幻視するわけではない。そこでブランドは一計を案じ、アメリカ航空宇宙局（NASA）に働きかけて、NASA が持っているはずの「宇宙から見た地球の写真」を公開せよと迫った。1958 年に設立され、以後、アメリカの宇宙開発を推進する母体となってきた NASA ではあるが、不思議なことにブランドに要求されるまで、NASA が宇宙から見た地球の写真を公開したことはなかったのである。

なお、ブランドは NASA に地球の写真の公開を要求するにあたって、非常に面白い手を使った。1966 年、彼は「Why haven't we seen a photograph of the whole Earth yet?」（なぜ我々は、全地球の写真をまだ見たことがないのだ？）という文言を印刷した大量の缶バッジを 25 セントで発売し始めたのだ。[23] 缶バッジに何らかの主張、例えば「ベトナム戦争をやめろ」（Stop the War）とか「愛し合おう、戦うのではなく」（Make Love, Not War）といった文言を印刷して売ることが、当時、ヘイト・アッシュベリー界隈のヒッピーの間で流行していたのだが、ブランドは自身、ヒッピーではなかったものの、こういうところでヒッピーたちの知恵を借りるのに吝かではなかった。

バックミンスター・フラーと「シナジー効果」

さて、NASA を相手に地球の写真の公開を促す運動を巧妙に進めていたブランドであるが、彼はその後も「全地球」というアイディアにますます固執するようになる。そしてそんなブランドにとってさらなる啓示となったのが、バックミンスター・フラーであった。NASA に対する働きかけを開始したのと同じ 1966 年、ブランドは後に『宇宙船地球号操縦マニュアル』（*Operating*

Manual for Spaceship Earth, 1968）という本の形にまとめられることになるフラーの学術講演を聴き、非常なる感銘を受けるのだ。『宇宙船地球号』というタイトルからも推測されるように、フラーは地球を「宇宙を航海する小さな宇宙船」に見立てているのだが、それはブランドが幻視した小さな、そして資源に限りのある「全地球」という概念に限りなく近い。漆黒の宇宙にぽっかりと浮かぶ地球、しかも資源に限りのある惑星としての地球を幻視したブランドが、フラーの講演に強く惹かれたのも当然だろう。[24]

では、ブランドが感銘を受けたという講演会の中で、フラーは一体何を語ったのか。仮にそれが後にまとめられた『宇宙船地球号操縦マニュアル』の内容と同じであるとするならば､およそ次のようなものであったはずである。

地球を宇宙船として見れば、これは非常によくできた宇宙船であって、太陽という実質無尽蔵の源からエネルギー供給を受け、月のサポートまで得て効率良く宇宙空間を航行している。また太陽から受けたエネルギーの余剰分は化石燃料として備蓄されているため、当面の間、困ることがない。だがそのこと以上に幸運なのは、宇宙船地球号に備え付けの「操縦マニュアル」が存在しないということである。操縦マニュアルが存在しないからこそ、人間は頭を使い、実験を繰り返しながら、少しずつ自力で操縦法を発見していくことができた。とは言え現時点での人間は未発達なところがあって、備蓄された化石燃料を大量に消費しながら宇宙船を操縦するというレベルでしかなく、このままだといずれ化石燃料を使い果たす時が来る。だからこそ今、さらに進化した新しい操縦マニュアルを考案しなければならない。

この現代的課題に対してフラー自らが出した答えが､「シナジー」ということだった。シナジーというのは、アイディアや物資の組み合わせに基づく相乗効果のこと。シナジー的に思考することで、1＋1 を 2 ではなく、3 にも 4 にもできる。だから、賢く操縦していけば、この先も人間はこの宇宙船地球号の中で不足に苦しむことはない。ただそうしたシナジー思考をするためには、従来の人間の学問の在り方であった専門化、すなわち、物事を細かく分解して理解するという方法に見切りをつける必要がある。専門化の逆、つまり総合化こそ、シナジー思考の鍵なのだ。

そしてこのシナジー思考の一つの例としてフラーが持ち出すのが、意外な

ことに「海賊」である。かつて陸地に住んでいた人々は、それぞれの地域の特性に順応して暮らしていたため、その結果として「異なる人種」とか「異なる言語」が発生し、異人種間／異言語間の壁を越えた協力体制を築くことができなかった。その一方、七つの海（実際には一つの海）を股にかけた海賊たちは、そうした壁を作らず、事に応じて生きたがゆえに、地球上の覇者になれた。だから今、もう一度その海賊的思考、つまりシナジー的思考を復活させ、それに基づいて宇宙船地球号の新しい操縦マニュアルを作る必要があるのではないか――これが『宇宙船地球号操縦マニュアル』の中でフラーが主張していることである。

人間の英知の海賊的／シナジー的総合化を唱導したフラーの講演に感銘を受けたスチュアート・ブランドが、1968 年 3 月、父親の葬儀からカリフォルニアに戻る飛行機の中で、眼下に広がる地球を見ながら、この資源の限られた小さな美しい惑星のために何かシナジー的な貢献をすることはできないだろうかと考えていた時にふと思いついたのが、地球に負担をかけずに人間が生きていくための様々なノウハウをカタログ形式で人々に伝えるということだった。ブランドが特にカタログ形式にこだわったのは、亡くなったばかりの父親が服飾カタログである『L・L・ビーン・カタログ』の愛読者であったこと、及び、ブランド自身、1967 年に亡くなった L・L・ビーン社の創立者レオン・ビーンに直接会ったことがあり、その人の人柄も含めて、このカタログに傾倒するところがあったからである。[25] またもしそのようなカタログを作るのであれば、そのカタログに掲載する商品に関しては、実際の購入者からの評価を取り入れ、それに基づいて商品の入れ替えをすることで、常に最良を目指した改善をしていくこともブランドは最初から計画のうちに入れていた。これは尊敬するノーバート・ウィーナーが主著『サイバネティクス』の中で提唱した「フィードバック」という考え方をカタログの編集に応用したものである。

そして「何かを思いついても、10 分以内に実行に移さなければ、それは夢の世界に消え去ってしまう」というバックミンスター・フラーの教えを座右の銘にしていたブランドは、この計画をすぐに実行に移すことにする。都合の良いことに父親の遺産が手に入ったばかりだったので、それをするだけの

経済的な余裕がブランドにはあったのだ。

WEC の創刊

かくして、資源に限りのある地球という惑星の上で人間が賢くサバイバルしていくための究極の DIY マニュアルを、カタログ形式で、しかも読者からのフィードバックを踏まえた改善を常時行ないつつ出すというスチュアート・ブランドの独創的なアイディアは、1968 年 9 月 1 日、WEC 創刊号となって実現する。その創刊号の表紙には、NASA が重い腰を上げて公開した地球のデジタル画像――人工衛星「ATS-3」が 1967 年 11 月 10 日に撮影した世界初の全地球画像――が掲載されていた。

非常に重要なことなので敢えて繰り返すが、WEC が創刊されたことによって、(NASA に勤めている人間など、ごく少数の例外を除いた) アメリカ人は、人類史上初めて、丸のままの地球の姿を見たのである。

しかし、斬新な表紙と斬新な内容をもったこのカタログが、創刊当初からすぐに世間の注目を集めるのに成功したわけではない。大判であること、またその内容が当時としては斬新過ぎたこともあって、直接書店を回っても置いてくれるところは少なかったのである。また郵送による販売は、本誌が「カタログ」と銘打っていたため、定期刊行物用の安い第二種レートではなく、カタログ用の高い第三種レートが適用されてしまったこともあって苦戦した。この点について同誌の発行元である NPO「ポートラ・インスティテュート」の理事のディック・レイモンドがサンフランシスコ郵便局に猛抗議し、「ならば郵便局は『ローリング・ストーン』誌が表題に「ストーン」と書いてあるという理由で、雑誌ではなく石の通販であると判断するのか」と詰め寄ったが、この説得力のある反論も残念ながら通らなかった。そこでスチュアート・ブランドは 1969 年 1 月、「ホール・アース・トラックストア」という路面店をオープンし、WEC の直接店舗販売を目論んだのだが、その開店記念パーティに招待者は一人も姿を現さなかったという。[26]

だが、科学雑誌『サイエンティフィック・アメリカン』誌が WEC を好意的に取り上げたことで、潮目は変わり始める。また『ワシントン・ポスト』紙の著名な記者であったジャーナリスト、ニコラス・フォン・ホフマンが書

いた称揚記事がアメリカ中の新聞に掲載されたのを機に、『タイム』誌、『ライフ』誌、『エスクワイア』誌といったアメリカの大手雑誌メディアが相次いでブランドの活動を紹介するようになり、WEC の知名度は一気に上昇、それまでサンフランシスコの小規模な配本業者ブック・ピープルが扱っていた配本業務も大手ランダムハウスが肩代わりすることとなって全米規模での販売がスタートすると、創刊 3 年目には販売部数も 100 万部を突破する勢いとなり、ブランド自身も「時の人」として『タイム』誌の表紙を飾ることとなった。

ちなみに、WEC の当時の人気ぶりを裏づけるような日本人の証言がある。1969 年、『平凡パンチ』の取材でニューヨークを訪れていた作家の小林泰彦と平凡出版編集者の石川次郎が、5 番街のダブルデイ書店の店頭に平積みにされた WEC が飛ぶように売れていく様を目撃しているのだ。二人は好奇心に駆られて自分たちも一部買い求め、日本に持ち帰ったものの、その不思議なカタログと、それがアメリカで異様に売れていることの意味を理解するのに 2 年ほどの年月を要したという。[27]

WEC の読者層

では、その「飛ぶように売れていた」WEC を、実際に買っていたのは誰なのか。

一つ確実に言えることは、サンフランシスコのヘイト・アッシュベリー地区に集団で住んでいたヒッピーたち――ではなかった、ということである。

実はサマー・オブ・ラブの余韻も冷めやらぬ 1967 年 9 月頃から、ヒッピーたちの姿はヘイト・アッシュベリーから消え始めていた。あまりにも過密になったヘイト・アッシュベリーの住環境の悪化もさることながら、前年 10 月に LSD が非合法化されたことで、警察の頻繁な家宅捜索が行われるようになり、これに嫌気が差した若者たちがこの地から離れるようになったのだ。

ヒッピー・ムーヴメントが急速に衰勢に向かい始めたこの年、西海岸の LSD 文化を牽引してきた作家ケン・キージーもこの種の活動からの「卒業」を宣言する。またセリン兄弟の「サイケデリック・ショップ」（前述）も店を畳むこととなり、この店の看板は「ヒッピーの死」と題されたセレモニーの

中で、数百人のヒッピーたちによって埋葬された。かくして運動の軸を失ったヘイト・アッシュベリーに若者たちの姿はほとんど見られなくなり、カウンター・カルチャーの主要素であったヒッピー・ムーヴメントは、完全に下火になったのだった。

では、ヘイト・アッシュベリーを去った元ヒッピーの若者たちは一体どこへ消えたのだろうか。

無論、一部は親元に戻った。もともとヒッピーの若者たちの大半はアメリカ中産階級の子弟、それも相当な収入と教養のある親を持つ子弟だったのであって、彼らには帰る家があった。[28] ヒッピーの中でも単にしばしのモラトリアム期間を謳歌し、親元を離れて羽を伸ばそうとしていただけの似非ヒッピーたちは、この辺が潮時とばかり、親元へ、すなわち「スクエア」な社会へと戻っていったのである。そしてその後、彼らはヒッピー時代とは打って変わって保守化し、社会や政治のことより自分たち自身の生活のクオリティを上げることに熱心になったため、後にジャーナリストのトム・ウルフ（Tom Wolfe, 1930-2018）から「我儘な世代」（Me Generation）なる烙印を押されることになる。

また別の一部はバックパッカーとなって海外に出た。というのも、1957 年にアーサー・フロマー（Arthur Frommer, 1929- ）が自費出版して以来、世界中のバックパッカーたち――その中には日本の小田実も含まれる――のバイブルとなった『ヨーロッパ一日 5 ドルの旅』（*Europe in 5 Dollars a Day*）の影響で、この頃、ヨーロッパに旅立つアメリカの若者が増えていたのだ。1 日 5 ドルで過ごせるならば、観光地化されてしまったヘイト・アッシュベリーにたむろするよりもヨーロッパ各地を旅した方が、あるいはスコットランドのフィンドホーンに行って一風変わった共同生活を楽しんだ方が、[29] モラトリアム期間を謳歌する方法としては気が利いている。こうした若者による貧乏旅行ブームは、1973 年にトニーとモーリーンのウィーラー夫妻（Tony & Maureen Wheeler）によって創刊され、WEC でも紹介された『ロンリー・プラネット』（*Lonely Planet*）シリーズの影響で、旅行先にアジア諸地域を含みながら、ますます加速することとなる。[30]

だが残りの一部、ヒッピー・ムーヴメントのコアに居た最も意識の高いヒ

ッピーたちは、もうしばらくカウンター・カルチャーの流れの中に留まることにした。彼らはヘイト・アッシュベリーを後にすると、田舎に家を借り、見よう見まねで野菜を栽培したり、鶏を飼ったりしながら自給自足のコミューン生活を始めたのである。このような元ヒッピーたちによる最初のコミューンの試みは、1966 年の春、サンフランシスコ北部の郊外に元フォーク歌手ルー・ゴットリーブ（Louis "Lou" Gottlieb, 1923-96）が設立した「モーニング・スター農場」を嚆矢とするが、翌 1967 年には『ライフ』誌が「アメリカにコミューンがやってきた」という特集記事を組み、1971 年には『サタデー・レヴュー』誌が「アメリカ 34 州に 2000 から 3000 ものコミューンが存在している」と報告していることから、この時期、全米各地にコミューンが作られていたことが窺われる。[31]

この自給自足のコミューン生活を始めた若者たち、彼らこそがヒッピーたちからカウンター・カルチャーの松明を引き継いだ「ニューエイジャー」なのである。

ニューエイジャーの若者たちは、ヒッピーたちとは異なり、ベトナム反戦を唱えてスクエアな社会からドロップアウトするだけでは意味がないと考えた。既存の社会の在り方を批判するのなら、それに代わる社会を提案・構築しなければ、正当な批判にはならないと考えたのだ。そしてそんな彼らが、自分たちが過ごしてきた大量消費社会のオルタナティヴとして掲げたのは、「自然へ帰れ」というコンセプトだった。地球に過度な負荷をかけることなく集団で力を合せながら自給自足の生活を営むということが、彼らの新たな目標となった。

またそのような生活を目指すこととなった時、その恰好のモデルとなったのが、かつて北米大陸を支配していたインディアンの暮らしである。と言うのもこの時代、セオドーラ・クローバー女史の手になる『イシ：北米最後の野生インディアン』（Theodora Kracaw Kroeber Quinn, *Ishi in Two Worlds*, 1961）という本がベストセラーとなり、特にカリフォルニア州では中学校・高校の指定図書になっていたことも手伝って、インディアンという存在が「古の野蛮人」としてではなく、現代アメリカ社会の在り方とは別の社会の在り方の可能性を示すような「聖なる賢者」として、広く知られるようになって

いたからである。また先に言及したカルロス・カスタネダの 1968 年のベストセラー『ドン・ファンの教え』によって、西洋文化とは別種のものとは言え、同じように深遠な智慧を備えたインディアン文化への一種の憧れが、ニューエイジャーの若者たちの間に広まっていた。インディアンのように自然と調和しながら暮らしたいという思いが、当時のアメリカの若者たちの間に一つの理想として、存在していたのだ。

だが、高度文明社会の只中に生まれ落ちた元ヒッピー／現ニューエイジャーの若者たちにとって、自然に帰ることはそう容易ではなかったはずである。畑を作るにしても、家禽を飼うにしても、家を建てるにしても、その方法も分からなければ必要な道具も分からず、それらをどこで手に入れればよいかも分からない。知識と道具――彼らにとって切実なまでに必要だったのは、この二つだった。

そしてまさにこの二つの必要を満たしたのが、WEC だったのである。

WEC 創刊に先立つ 1967 年 7 月、スチュアート・ブランドは全米各地に創設され始めたコミューンを視察して回り、WEC のパイロット版ともいうべき小冊子を試験的に 1 ドルで売ってみたことがあった。そしてこの時の経験から、この種の新生コミューンで暮らす人々に何が必要で、彼らが何を欲しているか、彼は知っていた。だから WEC のようなカタログを出せば、コミューンに暮らすニューエイジャーの若者たちに重宝されるであろうことを、ブランドはあらかじめ十分に承知していたのだ。

ブランドが承知していなかったのは、実際に自給自足のコミューン生活に参加するところまでは行かないまでも、心の内ではニューエイジャーの考え方に同調するような膨大な数の読者がアメリカ中に潜在的に存在していたということである。コミューン生活に一種の憧れを抱きつつ、そこまで夢を追い続けられずに現実社会に戻っていたかつてのヒッピーたち、仮に彼らを「在宅ニューエイジャー」と呼ぶとすれば、数の上から言えば本物のニューエイジャーを遥かに凌駕するこの膨大な数の在宅ニューエイジャーたちにこそ、WEC は強烈にアピールしたのだ。WEC が西海岸だけでなく、ニューヨークのような東部の大都会でも飛ぶように売れていた理由はそこにある。

もっとも刊行物としての WEC は意外に短命で、1968 年秋に出た創刊号の

後、『1969 年春号』『1969 年秋号』『1970 年春号』と基本的には年 2 回の発行を続けたものの、1971 年の *The Last Whole Earth Catalog* で一応の終刊となる。その後 1974 年に *The (Updated) Last Whole Earth Catalog*（5 月）と *The Whole Earth Epilog*（10 月）が出た他、1980 年秋に *The Next Whole Earth Catalog* が、また 1986 年には *The Essential Whole Earth Catalog* が出て、1994 年には *The Millennium Whole Earth Catalog* が刊行されるが、これらはあくまでも記念復刊的なものであり、スチュアート・ブランドが直接係わったものとしては、1971 年の *The Last Whole Earth Catalog* までの 5 号で終わっている。つまり WEC は実質 1968 年から 1971 年までの 4 年間しか刊行されていないのだ。加えてこのカタログが直接的に支援したニューエイジャーたちのコミューン活動も、実際には短命に終わることが多かったので、有用な情報カタログ誌としての WEC の存在意義は、1970 年代初頭には既に終焉を迎えていたと言うこともできる。

WEC がもたらした「全地球思考」と「エコロジー・ブーム」

だが、一見すると短命に終わった WEC がその後のアメリカ社会に直接的・間接的に残した影響の大きさは、計り知れないものがあった。カタログという形式の中に凝縮された WEC の様々なアイディアの種が、しばしの時を経て一斉に発芽し始めたかのように、1970 年代以降のアメリカ社会のそちこちに WEC の影響と思しき一定の方向性を持った潮流が次々と生み出されていくのだ。

例えば WEC が引き起こした潮流の一つに「全地球思考」と、その帰結としての「エコロジー・ブーム」がある。WEC がその創刊号から一貫して「地球のことをもっとよく知ろう」という提案をしてきたことは既に述べたが、それと共にスチュアート・ブランドの果敢な公開要請運動の甲斐あって人類史上初めて公開されることとなったあの「宇宙空間に浮かぶ地球の写真」がもたらした絶大なインパクトが、地球全体のメリットを優先的に考える「全地球思考」とも呼ぶべき一つの視座を生み、それがまた地球環境保全を訴えるエコロジー・ブームを生み出したのである。

と言うと、「地球の写真を見ることが、果たしてそれほど大きな影響を持つ

ものか？」と疑問に思う人が居るかも知れない。しかしそれは既に地球の写真を見慣れてしまった現代人の思うことであって、それを初めて見た世代にとって、その衝撃はたとえようのないものであった。

例えば「年に一度、地球環境を考える日」として 1970 年 3 月 21 日に始まった「アース・デイ」の提案者であるジョン・マコーネル（John McConnell, 1915-2012）も、宇宙から撮影された地球の写真を見た衝撃を機に、地球環境保全の熱心な推進者となった一人である。またそうであるからこそマコーネルは、人々の地球環境保全への意識を高めるべく、自ら「地球の旗」（図 3）なるものを考案したのだった。自分自身の経験から、地球の姿を目の当たりにすれば、この星を大切にしようという意識が自ずと生まれるはずだ、という期待がそこにあったからである。なおこの地球の旗は、その後「アース・デイ」のシンボルとして採用されたばかりでなく、WEC にも掲載され、このカタログを通じて一般に販売された。この旗の流通媒体として、WEC 以上に適切なメディアは、おそらくどこにもないだろう。

図 3　地球の旗

それだけではない。一旦起動された「全地球思考」とその延長線上にある「エコロジー・ブーム」は、アメリカ国内に留まるものではなく、すぐに世界規模の展開を見ることとなった。例えば 1972 年には「国際連合人間環境会議」（いわゆる「ストックホルム会議」）が開催され、「かけがえのない地球」（Only One Earth）を基調テーマとして環境問題が討論されたし、翌 1973

年には「ワシントン条約」が採択され、絶滅の恐れのある動植物の保護対策が打ち出された。また1973年はノルウェーの哲学者アルネ・ネス（Arne Næss, 1912-2009）が「ディープ・エコロジー」なる概念を打ち出した年でもある。人間の住環境を守るために公害防止などを訴える「シャロー・エコロジー」に対し、人間も含めた地球上の生命すべての相互関連の維持を目指すものを「ディープ・エコロジー」と呼ぶが、ネスのこの考え方もまた、もしWECなかりせば、というところがある。

ジェームズ・ラヴロックの「ガイア仮説」

そして1970年代の「全地球思考／エコロジー・ブーム」の広まりをさらに確固たるものにするのに一役買ったのが、イギリス人科学者にしてNASAで働いたこともあるジェームズ・ラヴロック（James Ephraim Lovelock, 1919- ）である。

「ガスクロマトグラフィー」（＝大気分析装置）の発明者でもあるラヴロックは、元々惑星の大気組成に強い関心があったのだが、彼は地球の大気の組成比率が何億年もの間、ほとんど変化することなく一定に保たれていることに着目し、この現象を説明するものとして「地球上のありとあらゆる生物、とりわけ藻やプランクトンといった微生物が、その生存に適した環境を地球と共同で作り上げているのではないか」という仮説を立てる。

ところで長期間に亘って一定の環境が維持されているとすれば、それは偶然には起こりえないことなので、そこに何らかの「知性」が参与していることになる。ならば地球にもある種の知性があると見なしてもいいのではないか――これが、ラヴロックが地球というものを単なる岩石の塊ではなく、擬人化し得るものとして考えるようになった契機であり、地球をギリシャ神話の女神にちなんで「ガイア」と呼び始めた理由である。[32] また地球という惑星を女神に擬すればこそ、その管理者となった人間には、ガイアの仕組みを解明し、彼女の健康を損なわないよう、生態系の維持に努める責任があるのではないかという主張も出てくるのであって、まさにこの主張こそ、ラヴロックが1979年に出版した著書『ガイアの科学　地球生命圏』（*Gaia: A New Look at Life on Earth*, 1979）の結論であり、この本はWECのスピンオフ

である *The Next Whole Earth Catalog*（1980）の冒頭において紹介されることとなった。

なお、ここで見逃してならないのは、ラヴロックが「知性を持った惑星＝ガイア」という新しい地球観を得たきっかけが、やはり、宇宙に浮かぶ地球の写真を初めて見た衝撃から生じていたことである。以下、『ガイアの科学』の一節を引用しよう。

> 私に言わせれば、宇宙研究の特筆すべき副産物は新しいテクノロジーではない。その本当のボーナスは、われわれが人類史上はじめて宇宙から地球を眺める機会をもったということであり、その球状の美に包まれた瑠璃色の惑星を外側から見て得られた情報が、まったく新しい一連の疑問や解答をもたらしてくれたということなのではなかろうか。[33]

暗黒の宇宙空間の中で地球だけがまるで宝石のごとく、とてつもなく美しい――この驚くべき事実を目にした NASA の宇宙飛行士の中には、ミッション終了後に宗教家の道に入った者も居るというが、[34] 地球を遥か上空から――すなわち神の立ち位置から――見下ろすような「超越的視点」を得たということは、その後の地球観の上に一大パラダイム・シフトをもたらさずにはおかないほどのものだったことが、ラヴロックのこの一文からも窺える。

そしてラヴロックの「ガイア仮説」の登場は、全地球思考に基づくエコロジー・ブームをさらに活性化させることとなった。その顕著な一例は、クリントン大統領の下で副大統領を務めたアル・ゴア（Albert Arnold Gore, Jr., 1948- ）の地球環境問題への取り組みである。WEC 同様、宇宙から見た地球の写真を表紙に据えた『地球の掟』（*Earth in Balance: Ecology and Human Spirit*, 1992）という著書も話題となったが、それ以上に大きな反響を生じさせたのが 2006 年のドキュメンタリー映画『不都合な真実』（*An Inconvenient Truth*）で、地球規模での環境保全の必要性を訴えたこの映画は、翌 2007 年、アカデミー賞（長編ドキュメンタリー部門）とノーベル平和賞の二つをゴアにもたらすことになった。WEC が一つのきっかけとなって生じてきた全地球思考／エコロジー・ブームの影響は、かくのごとく、21 世紀の今日まで続

いていると言っていい。

ヴェジタリアン文化の到来

ところで、上で述べてきた全地球思考の影響にはエコロジー・ブームの他にもう一つの支流がある。ヴェジタリアン文化がそれである。

WEC の創刊者スチュアート・ブランドのスタンフォード大学時代の指導教授が生物学者のポール・R・エーリックであることは既に述べたが、そのエーリックの主著であり、当然のごとく WEC でも紹介された『人口爆発』という本は、幾何級数的に増加する世界人口を賄う食料を生産するだけの余裕が地球にはないことを明らかにした本であり、資源に限りのある地球という惑星の中でいかに安全な食料を生産し、それを平等に分配するかは、エーリックの問題意識であると同時に、WEC が広く世間に提起した問題の一つでもあった。

そして WEC が提起した食料問題に一つの解決案を提示したのが、1971 年に出版されたフランシス・ムア・ラッペの『小さな惑星の緑の食卓』(Francis Moore Lappe, *Diet for a Small Planet: High Protein Meatless Cooking*) である。改めて指摘するまでもないが、本書のタイトルが『小さな惑星の・・・』となっていることからして、本書もまた WEC 由来の「全地球思考」の産物であることは明らかであろう。

本書の中でラッペが問題視するのは、アメリカ人の牛肉食である。

アメリカ人がこれほど牛肉食に偏るようになったのは 1950 年代以降のことであり、それは 1940 年代半ばから 60 年代にかけて行われた農業改革、いわゆる「緑の革命」の影響によるものだった。品種改良と化学肥料の大量投入により穀物の生産性――とりわけトウモロコシの生産性――が急激に上昇し、大量の余剰トウモロコシが生じたため、その余剰トウモロコシを肉牛の餌として用いたところ、今度は牛肉の生産が増えて値段が下がり、アメリカ人の食卓に牛肉が供されることが多くなったのである。

ただこのシステムによってトウモロコシの余剰問題は解決したものの、結果としてアメリカで生産される穀物の 9 割が肉牛の餌になるという状況が生じてしまう。アジアやアフリカでは飢えた人々が大勢居るのに、本来その人々

の口に入るべき穀物をアメリカでは牛が食べており、その牛をアメリカ人が好んで食べるという誤った飽食のシステムが出来上がっていたのだ。そして異常に増えた肉牛が出す糞尿や二酸化炭素による環境汚染の問題も含め、アメリカ人が好む牛肉食がいかに地球に負担をかけているかということに気づいたことが、ラッペをして『小さな惑星の緑の食卓』の執筆を思い立たせたのだった。

WEC の思想、あるいはその背景にあるバックミンスター・フラーの思想からすれば、問題のある現状の批判だけでは意味がなく、その問題の解決に資する代替案を検討し、より良い「宇宙船地球号」の操縦マニュアルを模索していくことが重要であるわけだが、ラッペもまた本書の中で、牛肉食の代替物を紹介・提案している。それが「植物性タンパク質」を中心に据えた新しい食生活であり、中でもラッペが注目するのが良質の植物性タンパク質の宝庫とも言うべき大豆である。

とは言え、本書が書かれた当時、アメリカでは大豆の存在はほとんど知られていなかった。それどころか、大豆が人間の食用になるものであるという認識すらなく、『ニューヨーク・タイムズ』紙が「中西部のある大学の食物研究室において、大豆が食べられることが発見された」という一報を載せたのは、1960 年代も後半になってからのことである。だからこそラッペとしては、単に大豆が食べられるという事実だけではなく、それを使った実際の料理を紹介しないわけにはいかなかった。『小さな惑星の緑の食卓』の後半が、大豆を含む豆類、乳製品、それに野菜を多用した料理――今日で言うところのオーガニック料理――のレシピ集になっていることには、そのような歴とした理由があった。そしてこのような数多くのレシピを紹介しながら、ラッペは「アメリカの各家庭の台所の漸次的な改善を通じて、地球全体の食料問題を改善する」という、慎ましくも気宇壮大な試みを行なったのである。

そしてラッペのこの本がミリオンセラーとなったことを受けて、アメリカにヴェジタリアン・ブームの第一波が到来する。例えばかつてカリフォルニア大学での学生運動（フリー・スピーチ運動）に参加したこともある元ヒッピーのアリス・ウォーターズ（Alice Louise Waters, 1944- ）が、1971 年に地元カリフォルニア州バークリーで開業したレストラン「シェ・パニーズ」

（Chez Panisse）は、有機栽培野菜を多用するオーガニック料理を供するレストランの最初期の例となり、アメリカ国内のみならず世界に追随者を生んだし、翌 1972 年にアナ・トーマスが出版した『ヴェジタリアンの美食家』（Anna Thomas, *the vegetarian epicure*）はラッペの本に劣らず大ベストセラーとなり、アメリカに豆腐を紹介したことでも知られるルイーズ・ハグラーの『ベジタリアン・クックブック』（Louise Hagler, *The Farm Vegetarian Cookbook*, 1975）や、世界史上の著名人に菜食主義者が多いことを論じたジャネット・バーカスの『野菜の情熱』（Janet Barkas, *The Vegetable Passion*, 1975）などと共に 1970 年代のアメリカにおけるヴェジタリアン・ブームを盛り上げた。また一旦火のついたヴェジタリアン・ブームは、例えば自然派スーパーマーケットの「ホール・フーズ・マーケット」（Whole Foods Market, Inc.）の設立（1978 年）や、フェアトレードに重きを置く自然派アイスクリーム・ショップ「ベン＆ジェリーズ」（Ben & Jerry's）の開業（1978 年）など、1970 年代を通じた自然派志向の大きな波に飛び火することにもなった。

拡散するカタログ文化

だが WEC によってもたらされたのは、「全地球思考」や「エコロジー・ブーム」、またその支流としての「ヴェジタリアン文化／自然派志向」だけではない。1970 年代以降、アメリカで急速に広がり始めた新しいタイプの「カタログ文化」もまた、WEC の直接の置き土産ということができる。単なる商品の紹介媒体でしかなかったカタログというものの概念を覆し、商品の羅列を通じて、一定の方向性を持ったメッセージ――すなわち「この小さな惑星の上で、賢くサバイバルしていこう」というメッセージ――を伝えたのが WEC であったわけだが、WEC 以後、アメリカでは何らかのメッセージが込められたカタログ、いわば「思想書としてのカタログ」が陸続として刊行されることになるのだ。

例えば 1971 年に出版された『ビー・ヒア・ナウ』（*Be Here Now*）という本がある。著者のラム・ダス（Ram Dass）とは、前述した「ハーバード・サイロシビン計画」の件でティモシー・リアリーと共にハーバード大学を追われたリチャード・アルパートの別名だが、彼は大学を去った後、インドに向

かい、かの地でヒンドゥー教のグル、ニーム・カロリ・ババ（Neem Karoli Baba, 1900?-73）の弟子となってヨガや瞑想の修行を積んだ後、「ラム・ダス」としてアメリカに戻り、精神世界の指導者として積極的な講演活動を行なっていた。

そんなラム・ダスが書いた『ビー・ヒア・ナウ』は、リチャード・アルパートがラム・ダスになるまでの自身の来し方を綴った第1部を除くと、後はロシア生まれの思想家ピョートル・ウスペンスキーやアルメニア生まれの思想家ゲオルギイ・グルジェフの著作、新訳聖書や正法眼蔵、またラルフ・ウォルドー・エマソンのエッセイやJ・D・サリンジャーの小説、さらにはサリンジャーの愛読書でもあった『巡礼の道』等々、古今東西の文献からの取り留めのない引用やお手製の箴言、架空の神秘問答、ヨガの体位や用語の解説、マントラの唱え方や瞑想の方法などの諸情報がランダムに並ぶ得体の知れない本になっている。

だが、本として見るとあまりにも統一感のないこの本を、仮に「カタログ」として見たらどうなるか。カタログであるならば、元来読み通す必要がないのだから、本としての統一感も必要なく、読者は個々の必要に応じたページを読み、そこから情報を得ればよいのであって、そういう読み方をする限り、この本の欠点と思われるものは雲散霧消してしまう。アメリカのサブカルチャーに詳しい細川廣次が、「『WEC』を右の車輪だとすると、もう一冊、左の車輪というか、ヒッピーを心の側からケアしようと意図して創られた精神世界のカタログがある。『ビー・ヒア・ナウ』だ」と述べ、本書をWECと一対になる「精神世界カタログ」と位置付けたのも、おそらくそうした理由からだろう。[35] そしてこの本が当時の若者たちにいかに大きなインパクトを与えたかは、例えばビートルズのメンバーのジョージ・ハリスンが、この本から直接のインスピレーションを得て、1973年に発表したオリジナル・アルバム（*Living in the Material World*）の中に「Be Here Now」という曲を収録していることからも推測できる。

だが『ビー・ヒア・ナウ』よりももっと明確に、自ら「カタログ」と名乗るカタログもこの時代には数多く出版された。例えば1973年に刊行された『新しい女性のためのサバイバル・カタログ』（*The New Woman's Survival*

Catalog）などはその好例と言ってよい。タブロイド判に迫る大判であることといい、ほとんど手作業の編集方法といい、創刊号 5 ドルの値付けといい、このカタログが WEC を範としていることは明らかだが、その内容はというと、女性向けメディアの紹介、フェミニズム運動への参加の仕方、女性の身体の仕組みや健康法、セクシズムへの対処法、女性を守る法律の知識、そしてレイプ魔から身を守る護身術に至るまで、その誌名に違わず女性が現代アメリカ社会を生き抜いていくために必要な情報集となっている。何しろ 1970 年代初頭と言えば第二派フェミニズム運動の真っ只中であり、そうした社会環境の中で新たなカタログ文化が花開いたのだから、「女性向けカタログ」というものが出てくるのも、何ら不思議ではないだろう。

そしてこの種の女性向けカタログの中でもとりわけ評判を呼んだのは、アリシア・ベイ＝ローレルの『地球の上に生きる』（Alicia Bay Laurel, *Living on The Earth*, 1970）であった。自身、著名な整形外科医の父と彫刻家の母からなる裕福な家庭に生まれ、やがてヒッピーとなってヒッチハイクで全米を経めぐり、最終的にカリフォルニア州北部にあった 100 人ほどのコミューン「ウィラーズ・ランチ」に腰を据えてニューエイジ的共同体生活を経験したという、まさにこの時代の若者の一つの典型を絵に描いたような著者によるこの本は、その前書きに「この本は、生活費をかせぐためにせっせと机で事務をとったりするより、森で木を切っていたいというひとのために書きました」とあるように、ニューエイジャー的な生き方を実践するためのノウハウ集と言っていい。具体的に言えば、バックパッカーとして徒歩旅行に出る準備の話から始まり、テントの作り方・張り方、カヤックやハンモックの作り方、薪ストーブの使い方、また日々の生活を運営していくための知恵として洗濯機を使わない洗濯の仕方や冷蔵庫を使わない食物の貯蔵法、天然素材で石鹸やロウソクを作る方法、機織りの仕方、服や靴の作り方、農作業や酪農の方法、様々な調理法、薬草の見分け方や煎じ方、さらには自然分娩での赤ん坊の産み方から死んだ仲間の火葬方法に至るまで、魅力的な自筆イラストをふんだんに使いながら手際よく説明されている。まさにコミューンでの暮らしを前提にしたサバイバル・カタログと言っていいだろう。

それにしても WEC に追随する一連のカタログ群の中に、女性著者の手に

なる女性のためのカタログが多いということは若干意外な気もする。が、しかし、よく考えてみれば、既存の社会を離れ、そのオルタナティヴとしての自給自足社会を新たに構築するとなった場合、まず第一に重要になるのは食料の確保や生活圏の整備であるのは自明のことであり、となれば野菜を育て、家畜を飼い、調理し、保存し、機を織り、服を作り、籠を編み、洗濯をするといった様々な場面で中心的な役割を果たすのはおそらく女性であって、その意味で WEC 以後に出たライフ・スタイル提案型のカタログ雑誌の多くが女性著者による女性向けのものであり、ある意味では女性向けの自己啓発本であったことも理の当然なのかも知れない。なおアリシア・ベイ＝ローレルの『地球の上に生きる』は、日本の女性誌『アンアン』が 1972 年 1 月 20 号の「アメリカ特集」の中で取り上げて紹介したこともあり、同年中に日本語版も出て 5 万部のベストセラーとなるなど、日本の女性たちの間でも相当な話題を提供した本となった。

日本におけるカタログ文化

ところで『地球の上に生きる』が本国での出版からさほど時間を置かずに日本で翻訳・出版されていることもそうだが、1970 年代のアメリカで隆盛を見たカタログ文化の影響は、比較的速やかに日本にも及んでいる。その最初の例が『週刊読売』の別冊として読売新聞社から 1975 年に刊行された『Made in U.S.A.』という雑誌で、これは当時アメリカで流行していた服、音楽、スポーツ、クルマ、住居など、若者のライフ・スタイルの諸相をカタログ風に紹介したものだった。これを編集したのは『平凡パンチ』元編集長の木滑良久と、同じく平凡出版元編集者の石川次郎。先に『平凡パンチ』の取材で 1969 年にニューヨークを訪れていた石川次郎と作家の小林泰彦が、いち早く WEC を入手したものの、なぜそれがアメリカで飛ぶように売れているのか、その謎を解くのに難渋したということを述べたが、結局彼らは WEC の思想性よりもむしろ即物的な側面に着目し、アメリカで流行しているモノの紹介をする雑誌として『Made in U.S.A.』を作り上げたのだった。そしてこの雑誌が 10 万部を売り尽くしたことに気を良くし、翌 1976 年には二匹目の泥鰌として『Made in U.S.A.-2』が出版された。またこれに追随したのが産経新

聞社で、同社は 1976 年、『週刊サンケイ』の特別増刊として『Do Catalog』及び『Do Catalog No.2』を出している。「アメリカン・ライフスタイルの“新しい動き”を知る本」という副題からも窺えるように、先行する『Made in U.S.A.』とよく似た体裁のカタログ雑誌であった。

一方、1969 年に銀座の洋書店「イエナ」で WEC を見かけて以来、この斬新なカタログに着目していた『宝島』誌編集長の北山耕平もまた、1976 年に『宝島』の別冊として『全都市カタログ』なる雑誌を出し、初版 7 万部を売り尽くしている。[36] こちらは誌面を「Whole System（総体）」「Future（未来）」「Land Use（土地利用）」「Politics（政治）」「Industry（消費生活）」「Community（コミュニティ）」「Learning（学習）」「Health（健康）」「Nomadics（放浪）」「Communications（コミュニケーション）」「Outdoor Life（アウトドア・ライフ）」の 11 項目に分類するなど、先に紹介した『Made in U.S.A.』や『Do Catalog』よりもはるかに明確に WEC を意識した作りになっていて、「日本版 WEC」と言っていい内容になっている。事実、『全都市カタログ』は、本家の WEC 同様、書籍の紹介が誌面の多くの部分を占めており、梅棹忠夫の『知的生産の技術』（1969）や谷川俊太郎の『マザー・グースのうた』（1975-6）など、本誌に紹介されたことで知名度を上げた本も少なくない。[37]

そしてこれら WEC から直接の影響を受けて刊行された単発のカタログ雑誌が一応の成功を見たことを受け、定期刊行物として改めて創刊されたのが日本のカタログ雑誌の草分けたる月刊誌『POPEYE』（1976 創刊）である。木滑良久編集長の下、「Magazine for City Boys」と銘打ち、アメリカ西海岸に暮らす若者のライフ・スタイルを模倣するのに必要な様々なモノ（＝商品）の紹介に努めたこの雑誌は、宝島系の『全都市カタログ』と言うより平凡出版系の『Made in U.S.A.』の直系というべきものだが、これが成功したことにより、以後、講談社の『ホットドッグ・プレス』（1979 年創刊）や集英社の『メンズノンノ』（1986 年創刊）など、「流行りもの」を紹介するカタログ雑誌が相次いで創刊され、バブル景気で活気づく 1980 年代の日本にカタログ文化／ブランド文化を定着させることとなる。いささか皮相的であるとは言え、WEC の影響はこのような形で遠く日本にまで及んでいたのである。

パーソナル・コンピュータ／インターネット社会への影響

ここまで WEC がその後の社会にもたらした様々な影響の例として「全地球思考とエコロジー・ブーム」「ヴェジタリアン文化と自然派志向」「（思想書としての）カタログ文化」を挙げてきた。しかし、WEC が後世に残した遺産の中で最も大きなものは、おそらくコンピュータとインターネットの組み合わせから成る電脳社会の在り方ではないかと思われる。

と、そのように言うと、疑問に思われる向きも多いだろう。何しろ WEC が創刊された 1960 年代末と言えば、コンピュータはまだ大型かつ高価であり、政府や一部の大企業が使うようなものに過ぎなかったのだから。またその使い道にしても、コンピュータは元来、カウンター・カルチャーが敵視した高度管理社会の道具、政府や大企業が一般市民の生活に目を光らせ、それを管理するためのツールだったのであって、擬人化されたイメージとしてはジョージ・オーウェルの『1984』に登場する「ビッグ・ブラザー」に近く、具体的なイメージとしては先に言及したケン・キージーの小説『カッコーの巣の上で』の中で象徴的に描かれた「コンバイン」という名の大型機器に近い。その意味で、コンピュータはむしろ WEC の理念に反するものという印象を与えるし、先に述べた「エコロジー・ブーム」や「ヴェジタリアン文化」など、WEC の影響下に生じた他のムーヴメントが基本的に「自然に帰る」ことを志向しているのと比べて、方向性が逆のようにも見える。

しかし、実は WEC とコンピュータ、あるいは WEC と SNS（のようなネットワーク）の親和性は意外に根が深い。スチュアート・ブランドは、WEC を創刊する以前、幻覚剤 LSD の可能性に思いを馳せる一方で、コンピュータの可能性、とりわけ今日で言う「パソコン」の可能性にもいち早く気づいていたのである。

ブランドがコンピュータなるものに初めて接したのは、スタンフォード大学時代に遡る。そしてその時、ブランドの目にはコンピュータが「ヒューマニズムのあるもの」として映じたという。[38] そしてブランドがコンピュータに対して抱いた好印象は、その後さらに強化されることになる。と言うのも、1970 年代初頭にスタンフォード大学の AI 研究所やゼロックス社の研究所などが立ち並ぶパロアルトを訪れた際、そこでブランドが目撃したのは、若い

研究者たちが 1969 年に運用が始まったばかりの ARPANET というコンピュータ・ネットワークを使って「スペース・ウォー」と呼ばれるゲームに興じる、そんな和やかな風景だったのだから。[39]

ちなみに、現在のインターネットの原型ともなった ARPANET が 1960 年代末のアメリカで構築された背景には、米ソ両大国が睨み合う冷戦時代の状況があったという説がある。ARPANET は網の目状のネットワークなので、仮にアメリカが他国（＝ソ連）から核攻撃を受け、そのネットワークの一部が破壊されたとしても、破壊された箇所を迂回した別ルートで情報の受け渡しができる。つまり敵国からのいかなる攻撃によっても、必要な情報の伝達に支障が出ないようなコンピュータ・ネットワークとしてあらかじめ設計されていた、と言うのだ。もっとも ARPANET が軍事的な必要から敷設されたという説が俗説に過ぎないことは、今日、明らかにされているのだが、[40] それにしても網の目状に広がるコンピュータ・ネットワークが情報の流れを止めることの難しいシステムであることは事実であり、それはまたこのネットワークを使って人が情報のやり取りをするのを為政者が取り締まろうとしても、そう簡単には取り締まることができないということでもある。

つまり ARPANET は、その後発展するインターネットに先立つ形で、世界各地に遍在する個々人を緩やかにつなぎ、必要な人に必要な情報が常時伝わるシステムを、部分的ながら構築していたことになる。これはセオドア・ローザックが語った「カウンター・カルチャー」に基づく革命、あるいはチャールズ・A・ライクが予言した「意識Ⅲ」による革命を実現させるための基盤となり得るシステムであって、しかもそのシステムを利用するためのツールが、政府や大企業が独占していた大型コンピュータではなく、アラン・ケイ（Alan Curtis Kay, 1940- ）が「ダイナブック構想」の中で夢見た「パーソナル・コンピュータ」であったとしたら、それはかつて LSD にかけられていた期待、すなわち「人間能力の拡張」を実現し、かつ、バックミンスター・フラーが『宇宙船地球号操縦マニュアル』の中で唱道した「海賊的／シナジー的総合化」を推し進めるための手段となる可能性は十分にあった。

だとすればスチュアート・ブランドが、WEC の刊行から手を引いた後、コンピュータ関連の情報誌である *Whole Earth Software Review* や *Whole*

Earth Software Catalog の創刊に踏み切り、そのことによって「パーソナル・コンピュータ」や「ネットワーク」の価値を伝える伝道師へと変貌を遂げたことも容易に理解できるだろう。何となれば、この 2 つのツールこそブランドが WEC 創刊時にやろうとしていたこと――つまり個人のエンパワーメントとその緩やかな連帯――を実現する早道だったのだから。

そしてブランドのその思いは、WEC に多大なる影響を受け、*The Whole Earth Epilog*（1974）の裏表紙に記された「Stay hungry. Stay foolish.」というメッセージを座右の銘としていたスティーヴ・ジョブズが、1984 年にパーソナル・コンピュータの決定版とも言うべき「マッキントッシュ（Macintosh／Mac）」を発売したことで、ほぼ実現することになったと言っていい。リドリー・スコットが監督したそのテレビ CM は、ジョージ・オーウェルのディストピア小説『1984』を彷彿とさせるような管理社会を背景に、その中で洗脳され人間性を失ってしまった人々の群れを、ハンマーを手にした勇ましきヒロインが救い出すという筋書きで、人々を洗脳支配する「ビッグ・ブラザー」が木っ端みじんに破壊される様を描いた映像の後、「1 月 24 日、アップルコンピュータはマッキントッシュを発売します。その時、1984 年が『1984』に描かれた世界のようにならない理由が明らかになるでしょう」というテロップが流れるというものであったが、ブランドにとって愛弟子のジョブズが作った「Mac」は、人々を高度管理社会の軛から解放する新種の LSD だったのだ。

だからこそブランドは、かつて人々に LSD の価値を伝えることに熱中したように、パソコンとネットワークの使い方を人々に教えるためのプラットフォーム作りに邁進した。それが 1985 年に彼が設立した電子掲示板「WELL（=Whole Earth 'Lectric Link）」であり、WELL の出現によって、パソコンとネットワークの組み合わせで一体何が可能になるのか、その無限の可能性のようなものを人々は体験できるようになったのだった。その意味でブランドの作った WELL は、後年マーク・ザッカーバーグ（Mark Elliot Zuckerberg, 1984- ）が起ち上げることになる「Facebook」（2004 年創業）の先駆でもあって、そのように考えてみると WELL が今日のパソコン・ネットワーク社会に与えた影響の大きさが理解できるだろう。ちなみにザッカーバーグは、

スティーヴ・ジョブズの作ったパーソナル・コンピュータ「Mac」と同じ 1984 年の生まれであり、かつ、スチュアート・ブランドと同じ「フィリップ・エクセター・アカデミー高校」の出身である。いささか話が上手過ぎるが、ブランドが蒔いた種は、スティーヴ・ジョブズやマーク・ザッカーバーグをはじめ、後輩たちの手によって次々に受け渡しされ、見事に花開いて行ったのである。

自己啓発本としての WEC

さて、ここまで WEC という一介のカタログが、内政・外政を含むすべての面で行き詰まりを見せていた 1960 年代末のアメリカ社会に新風を吹き込み、それを読んだ人々に対して「権威に依らず、自立した個人として生きること」を促すと同時に、全地球的観点からの目配りをも促し、結果として人々の暮らしを大きく変えることになった顛末について縷々述べてきたわけだが、この時点で改めて思い至るのは、このカタログの在り方が、先に述べた「トランセンデンタリズム」の伝統を正統に受け継ぐものであるということである。それはまた、20 世紀におけるスチュアート・ブランドの立ち位置が、19 世紀のアメリカを代表する哲人にしてトランセンデンタリズムの生みの親たるラルフ・ウォルドー・エマソンの立ち位置に極めて似ているということでもある。[41] と言うと、それはブランドを買い被り過ぎ、エマソンを貶めることになると思われる人も多いかも知れない。しかし実際のところ、ブランドとエマソン、あるいは WEC とトランセンデンタリズムを並置して見ると、両者があまりにも似ていることに驚かされる。

WEC の創刊者ブランドが、自身の LSD 体験を踏まえつつ、親世代が築き上げた高度管理社会の在り方に異を唱え、行き詰まりを見せていた既存社会へのカウンター・カルチャー／パラダイム・シフトとして WEC を創刊したこと、またそれによって新しい社会の構築を試みようとしていたニューエイジャーたちを後方支援する役割を担ったことは本論の中で述べてきたことであるが、一方のエマソンもまた、ボストン第二教会の聖職者の地位を公然と投げ捨てるという、いわば「ヒッピー的」な振る舞いに及んだ後、人間の価値を否定するカルヴァン主義的教義へのカウンター・カルチャー／パラダイ

ム・シフトとして、あるいはピューリタニズムに対するオルタナティヴとして、人間の価値を肯定する新たな思想であるトランセンデンタリズムを打ち出したのであった。両者がそれぞれ先行する時代に対して持った「対抗者」としての位置づけは共通しており、その意味でブランドにはエマソンという「予型」があったと言っていい。

それだけではない。スチュアート・ブランドの思想的後ろ盾であったバックミンスター・フラーは、トランセンデンタリストたちの機関誌（*The Dial*）の初代編集長にしてエマソンの右腕でもあったマーガレット・フラー（Sarah Margaret Fuller Ossoli, 1810-50）の姪孫であり、そのことを踏まえて言えば、ブランドと 19 世紀のトランセンデンタリストたちの間には、フラー家を通じての「血縁」があったとすら言えるのだ。またそのようにブランドとトランセンデンタリストたちの親和性について思いを馳せていくと、そもそも「トランセンデンタリズム」の語源となった「トランセンド」（transcend、超越する）という動詞自体、まるで LSD の人体に及ぼす効果を表す言葉であるかのような気さえしてくる。

両者の相似はまだ続く。ブランドの、そして WEC の影響を受けたニューエイジャーたちは「自然へ帰れ」の掛け声の下、古のアメリカ・インディアンの生き方に倣って全米各地に自給自足のコミューンを作ったわけだが、そもそも自然の中に足を踏み入れることの意義をアメリカで最初に取り上げた思想家はエマソンであり、その影響を受けて自然の中で自立的に暮らすことを最初に実践したのは、エマソンの直弟子とも言うべきトランセンデンタリスト、ヘンリー・デイヴィッド・ソローであった。またアメリカ・インディアンを「聖なる野蛮人」として美化する風潮は、先に挙げたマーガレット・フラーが 1844 年に世に問うた『五大湖の夏』（*Summer on the Lakes, in 1843*）という旅行記に端を発するのであり、ニューエイジャーたちが集ったユートピア的な農業共同体の元祖は、トランセンデンタリストたちが 1841 年にボストン郊外に設立した「ブルック・ファーム」（Brook Farm）だったのだから、両者の相似は極まったと言っていい。それどころか、ブルック・ファームもニューエイジャーたちのコミューンも、共に敢え無く短命に終わったというオチまで同じなのだ。

否、「ブランド／WEC／ニューエイジャーたち」と「エマソン／トランセンデンタリズム／トランセンデンタリストたち」が似ているかどうかはこの際、どうでもいい。重要なのは、両者がそれぞれの時代に向けていかなるメッセージを発し、また後世にいかなる影響を残したか、ということである。果たしてブランドと WEC が後世に残したものは、エマソンやトランセンデンタリズムが後世に与えた影響に匹敵するのかどうか――。

エマソンが 19 世紀のアメリカ社会に向けて発したメッセージとは、詰まるところ「自己信頼」という概念に尽きる。それはカルヴァン主義的ピューリタニズムが押し付けてくる価値基準ではなく、己の内側にある価値基準に自信を持って従え、というメッセージであると言っていい。政府であれ、教会であれ、いかなる外部的な権威にもひれ伏すことなく、自然の事物がそうであるように臆することなくこの宇宙の中に存在し、自分の内側から響く声に従って自らの本分を果たすこと、そしてそのような志を持った人間同士が付かず離れず、適当な距離を保ちながら連帯すること――それこそがエマソンが同時代のアメリカ人に伝えようとしたことであり、エマソンに影響を受けたトランセンデンタリストたちが実践しようとしたことであった。

そうであるとするならば、それはブランド／WEC が 20 世紀後半のアメリカ人に伝えようとした 2 つのこと、すなわち「政府や大企業や学校や教会といった権威の力を借りるのではなく（そんなことをするくらいなら Stay hungry. Stay foolish. である方がマシ）、個々人がそれぞれ力を蓄え、本来人間が持つ神のごとき創造力を発揮すること」、及び「自身の力と役割に気づいた者同士が緩やかに連帯すること」という 2 つのことと同じ方向性を持ったものと言えるのではないだろうか？ そしてこの 2 つのことは、その後「全地球思考に基づくエコロジー・ブーム」、「ヴェジタリアン文化と自然派志向」、「思想書としてのカタログ文化」、そして「パソコン・ネットワークに基づく電脳社会」と、多種多様な形を取りながら、ある程度のところまで実現したのではないだろうか？ だとしたらブランドが、そして WEC が成し遂げたことは、アメリカ 19 世紀思想界の巨人・エマソンが成し遂げたことと同等、否、見方によればそれ以上のものだったのではないか？

わずか数年間しか刊行されなかった WEC というカタログ雑誌が、アメリ

カの偉大な文化遺産の一つとして、今日に至るまでその存在と意義が忘れられていない理由はまさにここにある。エマソンが 19 世紀のアメリカ人を旧世代の価値観の桎梏から解放し、自由でポジティヴな方向に歩を進めようとしていた人々の背中を押したのだとすれば、ブランドと WEC もまた、それと同じことを、20 世紀後半のアメリカ人に対して、あるいはそれ以後の現代人に対して、したのだ。

今日、ラルフ・ウォルドー・エマソンが伝えようとした「自己信頼」の概念は、「トランセンデンタリズム」としてではなく、「自己啓発思想」として世に広まっている。またエマソンが書き残したエッセイや箴言の数々も、哲学書・思想書と言うより、むしろ「自己啓発本」として読まれ、そのように人口に膾炙している。それはエマソンが近年になって過小評価されるようになったという意味では決してなく、事情はまったくその逆で、エマソンの哲学・思想の持つ本質的なポジティヴさが、今日なお人々の心を捉え、その支えとなっていることの証左なのだ。自己啓発本として後世の人々に読まれるということは、そういうことである。

ならば我々は、エマソンが提唱したトランセンデンタリズムの伝統を正統に受け継ぐ WEC のことを、「カタログ」ではなく、「自己啓発本」と呼んでもよいのではないだろうか？

WEC とは、畢竟、自己啓発本の本場アメリカが生んだ、20 世紀最大の自己啓発本だったのである。

注

1　アメリカにおけるカタログ文化の歴史については、Robin Cherry の *Catalog: The Illustrated History of Mail-Order Shopping*（Princeton Architectural Press, 2008）が参考になる。

2　スティーヴ・ジョブズは 2005 年 6 月 12 日にスタンフォード大学の卒業式に招かれて祝辞を述べた際、WEC に触れ、“When I was young, there was an amazing publication called The Whole Earth Catalog, which was one of the

bibles of my generation.” と述べている。

3　スチュアート・ブランドの経歴については主として池田純一『ウェブ×ソーシャル×アメリカ』、ジェイムズ・ハーキン『サイバービア』、『Spectator』第29号及び第30号、それにウィキペディアから情報を得た。

4　LSDをめぐる諸言説については、主として竹林修一『カウンターカルチャーのアメリカ［第2版］』、マイケル・ポーラン『幻覚剤は役に立つのか』、テレンス・マッケナ『幻覚世界の真実』及び『神々の糧』、マーティン・トーゴフ『ドラッグ・カルチャー：アメリカ文化の光と影』、Albert Hofmann, *LSD: My Problem Child*、*LSD: PROBLEM CHILD AND WONDER DRUG: A Documentary by Michael McAleer*（ビデオ）、及びウィキペディアから情報を得た。

5　アルバート・ホフマンはLSDの発見者として知られるが、キノコからサイロシビンを抽出することに成功したのもまたホフマンである

6　J・B・ラインによる超感覚的知覚の研究については、ステイシー・ホーン『超常現象を科学にした男』を参照せよ。なお、念力の研究はソビエト連邦でもレニングラード大学の Leonid L. Vasiliev を中心として1930年代から盛んに行われ、アメリカ同様、軍事的な利用が見込まれていた。ヴァシリエフの著書 *Experiments in Mental Suggestion* は1963年に英語に翻訳され、英語圏に紹介されている。

7　竹林修一『カウンターカルチャーのアメリカ』41頁。

8　ポーラン『幻覚剤は役に立つのか』第2章の記述によると、ワッソンはメキシコへの冒険に先立つ30年前、新婚のロシア人妻と森を散歩していた時に、その妻が森のそこここに生えていたキノコに惹かれ、気味悪がるワッソンを尻目にそれを摘んで一緒に食べようとしきりに提案したことから、人類はアングロサクソン・ケルト系などの「キノコ嫌い民族」（マイコフォビア）とロシア・スラブ系などの「キノコ好き民族」（マイコフィリア）とに二分されるのではないか、またどちらの民族も共通してキノコに対して独特のオーラを感じるのは、有史以前、人間が幻覚キノコを食べて陶酔した経験があったからではないか、という仮説を思いつき、以来彼は多忙な銀行業務の傍ら、人間とキノコとの関係を研究し続けたという。

9　竹林修一『カウンターカルチャーのアメリカ』41-42 頁、及びウィキペディア「Oscar Janiger」の項目の情報に拠った。

10　ポーラン『幻覚剤は役に立つのか』256 頁。

11　ビートルズの映画『マジカル・ミステリー・ツアー』（1967）のモデルともなったこの旅の模様は、旅に同行したジャーナリストのトム・ウルフが書いた『クール・クール LSD 交感テスト』（Tom Wolfe, *The Electric Kool-Aid Acid Test*,1968）に詳しく描写されている他、*Magic Trip* というドキュメンタリー映画として 2011 年に公開された。

12　ハヴロック・エリスは 1898 年、*Mescal: A New Artificial Paradise* なる体験記を発表している。

13　オルダス・ハクスリー『知覚の扉』45 頁。

14　C・D・ブロードについては、茂木健一郎『生きて死ぬ私』第 3 章の記述を参照せよ。

15　教皇庁文化評議会／教皇庁諸宗教対話評議会編『ニューエイジについてのキリスト教的考察』は、疑似宗教としてのニューエイジの勃興を警戒し、ニューエイジと本来のキリスト教の違いがどこにあるのかを明確にするために編纂されたものであるが、その第二章においてアメリカにおけるウッドストック音楽祭やミュージカル『ヘアー』の人気の高まりへの言及がある。

16　1950 年代から 1960 年代にかけてのサンフランシスコの状況については、主として海野 弘『めまいの街　サンフランシスコ六〇年代』、竹林修一『カウンターカルチャーのアメリカ』、『Spectator』44 号（ヒッピーの教科書）、バートン・H・ウルフ『ザ・ヒッピー』に拠った。

17　城山三郎『ヒッピー発見　アメリカ細密旅行』37-38 頁。

18　紙幅の都合で省いたが、マリリン・ファーガソンもまた、この時期のアメリカで何らかの劇的な変革が切望されていた状況について、ローザックやライクと同様の解釈をしている。マリリン・ファーガソン『アクエリアン革命』を参照せよ。

19　LSD の入手し易さについては、竹林『カウンターカルチャーのアメリカ』34 頁を参照せよ。またヒッピーと LSD の関係については、ジェリー・ガルシア『自分の生き方をさがしている人のために』46-66 頁の記述が、当事者の発言

として興味深い。

20　LSD がヒッピーとなるための通過儀礼であったことについては、バートン・H・ウルフ『ザ・ヒッピー』232-233 頁を参照せよ。

21　「30 歳以上の大人を信用するな」は、1964 年にカリフォルニア大学バークレー校で勃発した「フリースピーチ運動」を指揮した活動家ジャック・ワインバーグ（Jack Weinberg, 1940- ）の言葉で、原文は「Don't trust anyone over 30.」である。

22　スチュアート・ブランドが LSD を服用して得た「地球は丸い」という啓示については、池田純一『ウェブ×ソーシャル×アメリカ』94 頁、『Spectator』（29 号）56 頁、ポーラン『幻覚剤は役に立つのか』228 頁を参照せよ。

23　ブランドの缶バッジについては、『Spectator』（29 号）56 頁を参照せよ。

24　ブランドに対するバックミンスター・フラーの影響については、池田純一『ウェブ×ソーシャル×アメリカ』96 頁、柏木 博「バックミンスター・フラーの影響力」『Spectator』（29 号）94-105 頁を参照せよ。

25　『Spectator』（29 号）56-57 頁を参照せよ。

26　WEC 創刊時のエピソードについては、小野耕生『バットマンになりたい』に収録された「全地球カタログ最終版」という章、とりわけ 142 頁を参照せよ。

27　赤田祐一『「ポパイ」の時代』300-302 頁を参照せよ。

28　ヒッピーの多くが上流階級の子弟であったことについては、竹林修一『カウンターカルチャーのアメリカ』71 頁を参照せよ。

29　フィンドホーン共同体は 1962 年、アイリーンとピーターのキャディ夫妻（Peter and Eileen Caddy）、それにドロシー・マクリーン（Dorothy Maclean）なる人物によって設立された。その後 1970 年にこの共同体に参加したアメリカ人のデイヴィッド・シュパングラー（David Spangler, 1945- ）の貢献によってニューエイジ的教育施設としての方向性が強まると、その噂はアメリカにも届き、1970 年代には毎年夏になると元ヒッピーの若者たちが大挙して訪れるようになったという。フィンドホーンについては、デイヴィッド・シュパングラー『人はなぜ生まれたか』、及び寺山心一翁『フィンドホーンへのいざない』を参照せよ。

30　「ロンリー・プラネット」と WEC の関係については、『Spectator』（30 号）

59 頁を参照せよ。

31　元ヒッピーたちによるコミューン・ブームについては竹林修一『カウンターカルチャーのアメリカ』第 4 章に拠った。

32　地球の擬人化に当たってラヴロックにギリシャ神話の女神「ガイア」の名前を提案したのは、『蠅の王』で知られるノーベル賞作家ウィリアム・ゴールディングである。当時二人はイギリスのコーンウォールに住む隣人同士だった。J・E・ラヴロック『ガイアの科学　地球生命圏』35 頁を参照せよ。

33　J・E・ラヴロック『ガイアの科学　地球生命圏』31 頁。

34　立花 隆『宇宙からの帰還』の中に収録された「神との邂逅」の中に、アポロ 15 号の乗組員であったジム・アーウィンが、地球への帰還後、説教師になった事例が詳しく紹介されている。

35　細川廣次「ヒッピーたちはお金とどう向き合ったのか？」『Spectator』第 30 号、102-103 頁。

36　『全都市カタログ』の創刊経緯については、『Spectator』第 29 号、32-35 頁を参照せよ。

37　『Spectator』第 29 号、61 頁の記述に拠った。

38　『Spectator』第 30 号、59 頁の記述に拠った。

39　スチュアート・ブランドとコンピュータとの邂逅については、池田純一『ウェブ×ソーシャル×アメリカ』58-80 頁の記述に拠った。

40　ウィキペディア「ARPANET」の項目を参照せよ。

41　エマソンをはじめとするアメリカン・ルネサンスの作家たちとカウンター・カルチャー全般の深い結びつきに関しては、池田純一『ウェブ×ソーシャル×アメリカ』第 6 章の記述に示唆を得た。

文献目録

（書籍）

赤木洋一『「アンアン」1970』平凡社新書、2007 年。

赤田祐一『証言構成「ポパイ」の時代――ある雑誌の奇妙な航海』太田出版、2002

年。
池田純一『ウェブ×ソーシャル×アメリカ　〈全球時代〉の構想力』講談社現代新書、2011 年。
海野 弘『めまいの街　サンフランシスコ六〇年代』グリーンアロー出版社、2000 年。
越智道雄『アメリカ「60 年代」への旅』朝日新聞社、1988 年。
小野耕生『バットマンになりたい　小野耕生のコミックス世界』晶文社、1974 年。
教皇庁文化評議会／教皇庁諸宗教対話評議会編『ニューエイジについてのキリスト教的考察』カトリック中央協議会、2007 年。
小林泰彦『ヘビーデューティーの本』ヤマケイ文庫、2013 年。
『シナジェティック・サーカス：バックミンスター・フラーの直観の海』(「P3 オルタナティブ ミュージアム 東京」における展覧会図録)、1989 年。
週刊サンケイ特別増刊『U.S.A. '76　DO CATALOG: SOURCE BOOK OF THE GOOD LIFE』産経新聞出版局、1975 年 12 月 15 日。
週刊サンケイ特別増刊『U.S.A. '76 SPRING　DO CATALOG: SOURCE BOOK OF ALTERNATIVE LIFE-STYLES』産経新聞出版局、1976 年 6 月 5 日。
城山三郎『ヒッピー発見　アメリカ細密旅行』毎日新聞社、1967 年。
『Spectator』第 29 号（ホール・アース・カタログ〈前篇〉)、幻冬舎、2013 年 12 月 20 日。
『Spectator』第 30 号（ホール・アース・カタログ〈後篇〉)、幻冬舎、2014 年 4 月 30 日。
『Spectator』第 44 号（ヒッピーの教科書)、幻冬舎、2019 年 7 月 8 日。
立花 隆『宇宙からの帰還』中公文庫、1985 年。
竹林修一『カウンターカルチャーのアメリカ［第 2 版］　希望と失望の 1960 年代』大学教育出版、2019 年。
寺山心一翁『フィンドホーンへのいざない　誰もが癒される不思議な場所がある』サンマーク出版、1998 年。
別冊週刊読売 6 月号増刊『Made in U.S.A. Catalog 1975』読売新聞社、1975 年 6 月 1 日。
別冊週刊読売 12 月号増刊『Made in U.S.A.-2　Scrapbook of America 1976』読売

新聞社、1975 年 12 月 1 日。
別冊宝島①『全都市カタログ　都市生活者のフォークロア』JICC・出版局、1976 年 4 月 1 日。
三浦 久『追憶の 60 年代カリフォルニア　すべてはディランの歌から始まった』平凡社新書、1999 年。
茂木健一郎『生きて死ぬ私』ちくま文庫、2006 年。
スチュアート。ブランド著　仙名 紀訳『地球の論点　現実的な環境主義者のマニフェスト』英治出版、2011 年。
ウィリアム・バロウズ著　鮎川信夫訳『ジャンキー』河出文庫、2003 年。
ウィリアム・バロウズ／アレン・ギンズバーグ著　山形浩生訳『麻薬書簡（再現版）』河出文庫、2007 年。
シオドーラ・クローバー著　行方昭夫訳『イシ　北米最後の野生インディアン』岩波現代文庫、2003 年。
ラム・ダス著　萩原茂久訳『覚醒への旅：瞑想者のガイドブック』平河出版社、1980 年。
ラム・ダス＋ラマ・ファウンデーション著　吉福伸逸＋上野圭一＋プラブッダ訳『ビー・ヒア・ナウ：心の扉をひらく本』平河出版社、1987 年。
ポール・R・エーリック著　宮川 毅訳『人口爆弾』河出書房新社、1974 年。
マリリン・ファーガソン著　堺屋太一監訳『アクエリアン革命―'80 年代を変革する「透明」の知性』実業之日本社、1981 年。
バックミンスター・フラー著　芹沢高志訳『宇宙船地球号操縦マニュアル』ちくま学芸文庫、2000 年。
マーガレット・フラー著　高野一良訳・解説『五大湖の夏』未知谷、2011 年。
ジェリー・ガルシア／チャールズ・ライク著　片岡義男訳『自分の生き方をさがしている人のために』草思社、1998 年。
L・グリンスプーン＋J・B・バカラー著　杵渕幸子・妙木浩之訳『サイケデリック・ドラッグ　校正新物質の科学と文化』工作舎、2000 年。
アル・ゴア著　小杉 隆訳『地球の掟：文明と環境のバランスを求めて』ダイヤモンド社、2007 年。
アル・ゴア著　枝廣淳子訳『不都合な真実』実業之日本社文庫、2017 年。

ジェイムズ・ハーキン著　吉田晋治訳『サイバービア　電脳郊外が“あなた”を変える』NHK 出版、2009 年。
ジョーゼフ・ヒース＋アンドルー・ポター著　栗原百代訳『反逆の神話：カウンターカルチャーはいかにして消費文化になったか』NTT 出版、2014 年。
ステイシー・ホーン著　石川幹人監修　ナカイサヤカ訳『超常現象を科学にした男—J. B. ラインの挑戦』紀伊国屋書店、2011 年。
オルダス・ハクスレー著　中村保男訳『永遠の哲学』平川出版社、1988 年。
オルダス・ハクスリー著　河村錠一郎訳『知覚の扉』平凡社ライブラリー、1995 年。
オルダス・ハクスリー著　黒原敏行訳『すばらしい新世界』光文社古典新訳文庫、2013 年。
カルロス・カスタネダ著　真崎義博訳『ドン・ファンの教え』太田出版、2012 年。
ケン・キージー著　岩元 巌訳『カッコーの巣の上で』冨山房、1996 年。
テレンス・マッケナ著　京堂 健訳『幻覚世界の真実』第三書館、1995 年。
テレンス・マッケナ著　小山田義文・中村 功訳『神々の糧（ドラッグ）』第三書館、2003 年。
J・E・ラヴロック著　スワミ・プレム・プラブッダ訳『ガイアの科学　地球生命圏』工作舎、1984 年。
J・ラヴロック著　ルイス・トマス序文　スワミ・プレム・プラブッダ訳『ガイアの時代』工作舎、1989 年。
ジェームズ・ラブロック著　松井孝典訳『ガイア　地球は生きている』産調出版、2003 年。
ジェリー・ルービン著　田村隆一・岩本隼共訳　金坂健二解説『DO IT!（やっちまえ）：革命のシナリオ』都市出版社、1971 年。
ジェリー・ルービン著　田中 彰訳『マイ・レヴォリューション』めるくまーる、1993 年。
アルネ・ネス著　斎藤直輔・開 龍美訳『ディープ・エコロジーとは何か—エコロジー・共同体・ライフスタイル—』文化書房博文社、1997 年。
マイケル・ポーラン著　宮﨑真紀訳『幻覚剤は役に立つのか』亜紀書房、2020 年。
チャールズ・A・ライク著　邦高忠二訳『緑色革命』早川書房、1971 年。
シオドア・ローザック著　稲見芳勝・風間禎三郎訳『対抗文化の思想：若者は何を

創りだすか』ダイヤモンド現代選書、1972 年。
セオドア・ローザック著　木幡和枝訳『地球が語る【宇宙・人間・自然】論』ダイヤモンド社、1994 年。
デイヴィッド・シュパングラー著　山川紘矢・山川亜希子訳『人はなぜ生まれたか』日本教文社、1998 年。
マーティン・トーゴフ著　宮家あゆみ訳『ドラッグ・カルチャー：アメリカ文化の光と影（1945～2000 年）』清流出版、2007 年。
アンドリュー・ワイル著　名谷一郎訳『ナチュラル・マインド　ドラッグと意識にたいする新しい見方』草思社、1977 年。
トム・ウルフ著　飯田隆昭訳『クール・クール LSD 交感テスト』太陽社、1971 年。
バートン・H・ウルフ著　飯田隆昭訳『ザ・ヒッピー　フラワー・チルドレンの反抗と挫折』国書刊行会、2012 年。
Robin Cherry, *Catalog: The Illustrated History of Mail-Order Shopping*, Princeton Architectural Press, 2008.
Kirsten Grimstad & Susan Rennie eds., *The New Woman's Survival Catalog*, Coward, McCann & Geoghegan, Inc./Berkley Publishing Corporation, 1973.
Albert Hofmann (Trans. Jonathan Ott), *LSD: My Problem Child, Insights/Outlooks*. Oxford UP, 2013.
Alicia Bay Laurel, *Living on The Earth*, Vintage Books, 1971.
Anna Thomas, *The Vegetarian Epicure*, Vintage Books, 1972.
Barbara Ward, *Spaceship Earth*, Columbia UP, 1966.

（ビデオ）
LSD: Problem Child and Wonder Drug: A Documentary by Michael McAleer. UPLINK, 2008.
Magic Trip: Ken Kesey's Search for A Kool Place, STUDIOCANAL LTD., 2011.

（付記：本研究は JSPS 科研費 JP20K00387 の助成を受けたものである）